

大典禪師『初学文談』―翻刻と注釈

国語科 篠崎 秀樹

ここに翻刻紹介する資料は、江戸時代寛政年間（一七八九―一八〇二）に刊行されたもので、だいてん釈大典の漢詩文に関する講義を弟子がまとめたノートである。だいせん題簽（げだい外題）は「初学文談」、扉は「初学文譚」、内題は「初学文談」となっている。恐らくは「しよがくぶんだん」と濁って読ませたものであろう。漢文の把握のしかた・考え方を啓発してくれる優れた漢文入門になっている。要約を載せると長くなるので、直接に原典に当たっていただきたい。「初学ノタメニ文章ノ初歩・詩道ノ大意ヲ説ク」（36丁表）とあるように、訓読の歴史から始まり、語論・文論・詩等、漢文の基本的理解に関わる全般的事項についていかにも「碩学の小著」を思わせる奥行の深い議論が展開されている。特に助字の解説は有益であり、併せて昔の漢籍に見受けられる「意識」タイプの漢文訓読への展望を与えてくれる。ただし、引用文が短く、趣旨を理解するには相当に困難を感じたので、背景を知るために今日のWEB環境を利用して国語科の教員に分かる範囲の注釈を施した。注釈は本文の後に掲載した。この作業を通してさまざまな漢籍に当たり、その意味でも非常に勉強になった。何分誤りの少ないことを願うが、おかしいところは批正をお願いする。

大典は、諱を顕常という。臨済宗の僧侶で、宗派では梅莊顕常を

正式名とし、釈顕常の意でせん常とも名乗った。別号に淡海・小雲棲・北禅・蕉中等がある。近江国神崎郡伊庭郷（滋賀県神崎郡能登川町）の儒医今堀東庵の子太一郎が俗名だが、親交のあった木村兼葭堂旧蔵の書簡集に権大納言園基勝の子とする記事がある由で、今堀家に里子に出されたものかともいう。京都五山の相国寺慈雲庵の独峰慈秀の許で出家得度、旁ら宇士朗（宇野明霞）・大潮元皓に古文辞学派の漢学を学んだ。相国寺在住の売茶翁とも交流があり（唯一の伝記『売茶翁伝』をものす）、伊藤若冲を見出だし、木村兼葭堂の尊崇を受け、六如慈周・片山北海・篠崎三島・高芙蓉・葛子琴・池大雅等とも交際したという。京都相国寺・南禅寺の住持を歴任し、五山碩学・朝鮮修文職に任ぜられた。朝鮮修文職のことは、本書の序文にも見える。要するに江戸中期安永・天明頃の京都文苑における学者文人として屈指の人であった。本文の中には、師の明霞が中国語の原音で学ぶことを漢詩文学習の「正路」とし、和読を「捷徑」と位置づけたという話が見え、当時の漢学者たちには白話を含め、原語に基づいた漢文理解が可能だった人も意外に多かったようだ。

漢文の提要・参考書類は、和刻の語法書に由来している。江連隆『漢文語法ハンドブック』（大修館書店 一九九七）は荻生徂徠『訓訳示蒙』『訳文筌蹄』、伊藤東涯『操觚字訣』『用字格』、皆川淇園『助字詳解』等を語法説明の根拠として引用するが、これらは当時の代表的な書籍だった。語法に特化した江戸期の和刻本を集めたものには、

吉川幸次郎・小島憲之・戸川芳郎編『漢語文典叢書』七卷（汲古書院一九七九〜八二）がある。その第一卷に徂徠・東涯・淇園と名を並べて釈頭常の『詩語解』『文語解』『詩家推敲』を収めている。『詩語解』二卷、『文語解』五卷は、三十歳にして『明霞先生遺稿』八巻を編み、字門の高足であった大典が師の草稿に加筆上梓したもの、『詩家推敲』二巻はその姉妹編である。他に明霞の『唐詩集註』七巻を補充して刊行。自身の代表作には、『昨非集』一卷、『諸宗伝略』一卷、『世説鈔撮』四卷（他に『世説鈔撮補』二巻、『世説新語補鈔撮集成』一〇巻）、『唐詩解頤』七巻・補遺、『初學文軌』二巻、『學語編』二巻、『聯句式』一卷、『尺牘語式』三巻（下「尺牘寫式」）、『小雲棲稿』六巻、『小雲棲手簡』三編各二冊、『小雲棲詠物詩』二巻、『茶經詳説』二巻、『皇朝事苑』四巻、『北禪詩鈔』二巻（『昨非集』改題修訂）、『北禪詩草』六巻、『北禪文草』四巻、『北禪遺草』八巻等がある。さらに朝鮮通信使一行との応接の記録『萍遇録』二巻が写本で伝わる。なお、著述目録一つでも今日になつては集めにくいところで、この機会に参考になる記事を拾うことにする。『初學文軌』巻末に「大典禪師著述目録」（寛政12年（1800））があるが、本書刊行の翌享和元年（1801）に著者は八三歳で没している。この目録によれば、『小雲棲稿』は一・二巻、『小雲棲手簡』は四編まで、『世説集成』は六巻（これと『補』『鈔撮』を合せて一〇巻となる）、『初學文軌』は三巻とあり（手許の同書は乾坤二巻仕立）、他に『四書越俎』四巻、『柿本人丸事跡考』一卷、『蛾眉山月圖説』一幅、『九族

稱呼圖』一幅、『初學文譚』一卷、『唐詩擷英』一卷、『杜律發揮』三巻、『唐詩礎續編』一卷、『拜説』一卷、『平安齋攷記』一卷、『金剛經三譯合本』一卷、『金剛經集解』二巻、『地藏本願經和解』一卷、『續文變』一卷等があり、『萍遇録』『北禪禪語』『北禪法語』『北禪雜録』等が「未刻」となっている。このうち『拜説』は『大典禪師伽陀』一卷にも附録として収められている（但し、『北禪雜録』は後出 IRIZ DB に書目だけ挙げてある）。他には『難僧要訓』一卷があり、『歐蘇手簡』など大典が序文等を寄せたり、校閲・補足したりした書目もいくつかある。この他のもの若干は国立情報学研究所（ZIN）の大学図書館横断検索サービスである CINI Books で「顕常」と入力すれば拾うことができる。未刻の三部ほどは刊行されなかった可能性がある。これらの著述の中で代表的なものの電子テキストデータは、国会図書館、国文学研究資料館に少し、早稲田大学の「古典籍データベース」に割合多く収められている他、慶応大学所蔵本を Google Books として（画質は不問）電子化したものの一部が、現在は著作権の関係で、^{ハathi} ^ハathi Trust Digital Library（米国図書館連合のリポジトリ）に収められ、制限付きながら公開されている。仏教関係では INBUDS DB なる検索サービスもあるが、使い勝手はあまりよくない。花園大学 IRIZ DB の禅書データベースや電子達磨が構築中である。

ところでなぜこの漢文典を翻刻したかについてだが、私の漢文語法への関心は、高校時代の『漢文学習小事典』（大修館書店）、『漢文提

要』(新塔社)等に始まるが、教員になってから『漢文学習小事典』の著者による『漢文語法ハンドブック』を専門的参考書として見た時に、「学校教育における『漢文の語法』の解説書としては決定版になった」(「はじめに」と自負する著者の言葉に慊かった。すでに『漢語文典叢書』の刊行がある中で、「資料」として引用する書目はなるほど他書とは一線を画していたが、それでもこれで「決定版」といえるだろうかと思われた。もともと京都書房や中央図書など新版『国語便覧』が出始めていた学生時代に、それぞれの個性は感じながら、具体的にノートを取る段になると、いかにも似通った解説の繰り返しに漠然と「他社の敷き写し」の印象を持っており、参考書に対する不平が拭えなかったせいもある。学参などその程度のもので割り切って使うだけ大人ではなかったようだ。大典に関心を持ち始めたのは今世紀に入ってからで、『田』等から分かる限りのデータを拾い集め、A3判一枚ほどのメモ書きにまとめて、「こんな人がいるんだ。」と当時の同僚に渡したりしたこともあった。その頃は『漢文エディタ』(紀要前号に紹介)の制作に大分のめり込んでいたから、序でに知った名前だったのだろう。その後調査の糸は切れていたが、この人の名の古書がたまに出る度に手の届く範囲のものはぼつりぼつりと買い集めていた。そんな中でふと出会ったのがこの本である。『初學文軌』などは韓愈・柳宗元の中唐二大家の文章について、読解の勘所を注記の形で施したもので、要所ごとに必要最小限度の傍

註を施している。その手法の中に、訓詁注釈を宗とする学者顯常の面目が窺える。よく似た標題だが、『初學文譚』の方は門弟子への講義録である。あるいはその体裁をとった漢詩文概論である。序文には「馬島之職」にあったところ、余暇に二三子と語った内容とある。それが好事家の手からふと書肆に持ち込まれたというのが、間違はなく本人の手は全編に行きわたっているはずである。大典が『萍遇録』を著したのは明和元年(1764)の頃で、朝鮮修文職に任ぜられたのが安永七年(1778)、対馬の以^い酹庵に天明元年(1781)から三年まで赴任している。享保四年(1719)生れの顯常の対馬在任は六十代初めのこととなる。『初學文譚』の序が「天明甲辰」(天明四年(1784))、刊行が「寛政八丙辰」(1796)である。単なる注記にとどまらず、語りの調子をとどめながら、他書の序言・端書の中で展開するような議論をここでもとめて残しているところがユニークであり、正に漢文概論である。大典自身のまとまった考えを述べたものとして貴重で一冊と考える。古書としては時に出回るが、図書館で所蔵しているところは極めて少い。七十種以上の著述をした人にしてこの有様なのだから、漢文典の世界だけに限っても埋滅しかけている他作者の大著述はまだ多いことだろう。私は元来森鷗外の研究家の端くれだったが、三好行雄のいう「漢文体の世界」への郷愁を鷗外の史伝は教えてくれた。読書家でないので郷愁は郷愁で終りそうだが、本書のようなガイドに出会ってぐいと一歩押し出された。(3・2)

【凡例】

- 原文の濁点の有無はそのままとした。一部、読みがなを施したところがある。
- 「一」カッコで示したひらがなルビは入力者によるものである。割注の中の原文ルビは（一）カッコ内に入れて示した。自序の丁数は別に数えた。
- 熟語を示すための右傍線は省略した。《例》事情、日本紀、トーンヤンケン
- カナの合字のうち「寸（時・トキ）」「一（事・コト）」等はコード化されているのでそれを使い、「モ（トモ）」「モ（トモ）」「メ（シテ）」等は二字で記した。
- 原文では「得・況・達・解」等を「得・況・達・解」と表し、「勢」や「教」等は、各々「勢・勢」「教・教」など両様に表記している。これを特に尊重しなければならぬ意味も感じなかったが、翻刻文でも文字の使い分けはそのままに示した。

〔外題（題簽）〕
初學文談 全

〔扉〕 大典禪師著／初學文譚／平安書林 京都市木屋町二條 貝葉書院

〔自序〕

郷者吾在リシ寸（とき）
二三子記ニ其所ヲ聞為テニ一冊ト以實ク帳中ニ。属（ロ）好
事ノ者以ニ其有ラレ益ニ初學ニ私ニ授テニ書肆ニ災スレ木ニ焉既ニ成テ跡ス
レ余ニ（一丁表）余曰有レ是哉吾宿習ノ所レ熏スル非ニ我事ニ而事トシレ之
ヲ又以テ是ニ非ス人之所ヲ一レ事トスル母一乃尸祝ノ代ルニハ二庖人ニ一乎雖モ
レ然リト外典也内典也流レ自ニ中華一皆莫シレ不「（こと）ニ文字是ニ因一」（一
丁裏）不ハレ因則已ヌ因ハ則不レ得レ不「ヲ明文不レハレ明義不レ明故ニ曰文

者貫道之器ト不ニ其然一乎苟モ文以セハニ其道ヲ一非ニ徒一文ニ也即チ宿習ノ
所レ熏スル豈徒ニ菁華是逞センヤ乎吾將ニ下以ニ先覺ヲ一（二丁表）覺シト中後
覺ヲ上も内外何ッ擇ン焉遂一事ハ不レ諫姑走シテ筆ヲ題シテニ其首ニ一與レ之ニ
（とき）
岨ニ天明甲辰三月杳常識（杳常之印）陽刻（二大典印）陰刻（二
丁裏）

〔内題〕
初學文談

○日本人ノ文章ヲ學ハ日本ノ事情ヲ中華ノ文字ニテ自由ニ書ル、様
ニスル「（こと）切要ニシテ第一字義ト句義トヲ明ニセザレバナラス」
ナリ先倭訓ニテ書ヲヨミ文ヲ解スル理ヲ微細ニ究明スベシ往古阿直
岐王仁百濟ヨリ來リ中華ノ書籍始テ傳ハリ菟道ノ王子二人ニ就テ學
問シ玉ヒ（一丁表）シヨリ段々皇朝ニ盛ニ行ハル、一、国史ニ載ス
ル所ナリ其ノ讀書學文ノ法唐人又ハ此方ノ華言ニ達シタル者ヲ音博
士ニ任シ人々其ニ就テ書籍ヲ習讀シ日本ノ言語ニテ此ヲ解ス直ニ倭
語ニテ書ヲ讀ト云「ハナシ故ニ日本紀等ノ古書ニ假名ノ付タルヲミ
ルニ句々ノ大意ヲ譯シタルマデニテ後世和訓ノ法トハ大ニ異ナリ善
道（一丁裏）真貞ガ至テ於ニ教授ニ一總テ用ルニ世俗踏訛之音ヲ一耳トア
ルヲ看テモ訛謬ナガラニ音讀ヲ用ヒタル「知ベシ今ノ字音モ皆真貞
カゴトク段々ニ訛傳シタルニテ日本ニテ更ニ声音ヲツケタルニハ非

ス漢音トイヒ吳音トイフモ其カタ少シ殘レリ

漢音ハ今イフ官話（フワンワ）ナリ吳音ハ今イフ杭州音（ハ

ンチウイ今華音ヲ以テ合セ按スルニ東冬陽庚ノ類トシヤンケントハヌ

ル韻ヲ皆「2丁表」トウヤウカウト唱工真寒先等ノハヌル音トワカ

チヌ緝治業等ノ入声ニフノ音ヲ付ルヲ以テミルニ其本ハ音ノ精キコ

推テ知ヘシ

コレ華音ニ精キ人ノ知コトナリ

然レハ往古文章ノ大意ハ和語ニテ譯シ字

句ノ精義ハ音讀ニテ修練スル者ナリ當時ノ文章四六ノ軀ヲ重トシ古

文ノ軀ハ能セザレトモ大體字句ノ義ハヨク明整ナルコト却テ近代ノ

「2丁裏」文ニ優レルコト多シ天慶天曆ノ比ヨリ文學ノ道ヤ、衰ヘ遣唐

留學ノ人モヤミケレバ音讀モスタレ次第ニ倭訓ニテ書ヲ讀ヤウニナ

リヲコト點ナド其比ヨリ起ルト見エタリ

今書籍ノ假名ヲ點トイフハヲコト點ヨリナリ

和訓ニ

テ書ヲヨミ大概ニ文義ワカルル故ニソノ上ヲ精究スルコトモナクマコ

トヘハハ信誠實真等ヲ混シアヤマルトイヘハ過誤「3丁表」謬錯

等ヲ混シ即便乃則輒等ヲ皆スナハチト訓シ也焉矣マタ乎哉耶歟等ノ

ワカチモ辨ゼズ字義スラ辨ゼザレバ

（まじ）

況テ語句ノ顛倒錯置ヲヤ日本

國裡ニ半華半倭ノ文ヲ書テ通用シ終ニハ中華ノ文字ヲ用テ日本ノ

俗話トナスコト今ノ書狀ノ類ナリ因テ凡ノ名称ニ字ハ唐ニテ義ハ唐ニ

通ゼザルコト十二九ナリ一一ニ改テ吟味セザレ「3丁裏」ハ識者トイ

ヘトモ覺エズ誤ルコト多シ倭語ハ倭語華字ハ華字ト分レザル故ニ子細

ラシク名稱ヲ呼テ文盲ナルコト枚舉スルニ限ナシソノ本和訓ニテ書ヲ
ヨミ精究セザルヨリ起ルコレ初學ノ第一ニ心ヲツクベキ所ナリ

○倭訓ニテ書ヲ讀キタリ人々口ニモ熟シ耳ニモ慣タルユエ大概文義

ヨク通スル様ニナリタ「4丁表」レトモトクト推テミレハ和語ノ本

義ニモアラズ一種ノ讀書語トナリタルコト多シ而則乃所以等ノ字ニア

テハシカフシテ。スナワチ。トキンバ。ユエン。ナドハヨメトモ倭

語ノ連續ニモカナハズ文字ノ義意ニモ當ラヌコト多シ其中ニハ展轉シ

テアヤマリ倭ノ本語ニモ非ルアリ如レ是ニシテ書籍ヲ解シ自己ニモ

文句ヲ綴ルコトナレバ等

（なほざり）

閑ニテ的正「4丁裏」ナラザルモコトハリ

ナリ

○今ノ學者音讀ノ正フシテ倭讀ノ正シカラザルコトヲ知トイヘトモ今

更華音ヲ學コトモハナハダ難クタトヒ學テモ日本人ノ心曾ナレバ華音

ノママニテ文字ヲ通解スルコトハ決シテナリ難シ故ニ今音讀ニテ學文

ヲ成就セント思ハ邯鄲ノ歩ヲ學ブタトエニ同シ且ク古來ノ倭讀ニ從

ヒ倭讀「5丁表」ノ盡サバル所ニ精彩ヲツケ文字ノ真面目ヲ見得ス

ルコト學文ノ緊要ナリ但華音ヲ兼習フテ文學ノ助トナルコトハ甚多シ凡

テ字音ノ字義ニアツカルコト多ク又文句ノ脉絡節奏華音ヲ知ニ因テ發

明スルコト多シ

○宇士朗ガ説ニ華音ハ正路ナリ倭讀ハ捷徑ナリトイヘル至當ノ説ナリ
リ喩ヘハ論語ノ賢賢易〔5丁裏〕色コレヲ解スルニ當_三以_レ賢_ヲ為_レ賢_ト以_レ易_フ其好_レ色_ヲ之心_ニ此且從_二朱子之義_一ト注スベキ所ヲ賢_{トシ}賢_ヲ易_ヨ色_ニト和訓ニヨミテソノ義自ワカル又徐禎卿力旅中ニ喪_フ女_ヲノ詩
ニ生男不下堂生女弃中野コレヲ注センニ縦_ヒ是生_モ男子_ヲ猶當_ニ不_レ下_サ堂_ヲ而撫_一育_ス之_ヲ而況_ニ女子_ヲ而弃_ル之_ヲ中野_ニ乎
ト數十字ヲ用ユベキ所ヲ生_テ男_ヲ不_ル下_レ堂_ヲ生_テ女_ヲ弃_ニ中野_ニトワヅカノテニハヲ付テソノ義明ニ〔6丁表〕キコユ此ニヲ舉テ推
知ヘシ又亂政ノ二字ニ政之亂_ル也。亂_ニ其政_ヲ也。亂_ハ治也謂_レ治_ルヲ
其政_ヲ也ト三義アレハ各註ヲ下シテ分ツナナルニ亂政_ル亂_レ政_ヲ
亂_ム政_ヲト和讀ノ上ニテハ直ニ解スベシ此ミナ倭讀ノ捷徑ナル所
ナリ捷徑ノ益アル故ニ又害アリソノ故ハ賢賢易色ノ類古文ノ簡古ニ
シテ意味ソナワリタル句法ヲモ知リ又簡古ノ文牀ヲ學テ通ズル〔6
丁裏〕ト通ゼザルトノ工夫ヲモ着ベキ所ヲタゞ倭讀ニテ大概ニスマ
シ精シク會得スルヲナシ況ヤ詩語ハ格律音調ノ節奏アリテ含蓄錯綜
ノ辭ヲ重トスレハ倭讀ニテ解スルハタゞ一往ノ意味ナリ古詩ヲ解ス
ルモ自己ニ作ルモ此旨ヲ會得セザレバ詩ノ佳境ニ入_レ能ハズ
○又倭訓ニテ讀レザル所アリ論語ノ先行其言〔7丁表〕而後從之ノ
文先_ツ行_テ其_ニ所_ヲ當_ニキ_レ言而後其_ノ言從_レ之_ニノ意ナリ先行_テ其_ニ

言_ヲ而_{シテ}後從_レ之_ニト讀テモ盡サズ先_{シテ}行_ヲ其言_{ヨリ}而後從_レ之_ニト
讀テモ盡サズ又文選ノ王命論ニ故_ニ能為_ニ鬼神_一所_ニ福饗_セ天下_ニ所_ル
ニ歸_往セコレ天下ノ上ニモ為_ニノ字ナケレバ讀ガタシ又蔡琰力胡笳ニ
無_ニ日_ト無_レ夜_トシテ今不_レ思_ニ我郷土_ヲコレ下ノ無_ニノ字ヲ除ザレバ
ヨマレズ此ミナ艱澁ノ文ニ非レトモ倭訓ニア〔7丁裏〕ツレバ難澁
ナル様ニ覺ユルナリ此類ニテ中華ノ文勢語脉ノチガヒアルヲヨク
會得スベシ讀レザル所ヲ看テ讀ル、所モ全ク盡サマルヲ知ベシ
右ハ一句ノ上ニ就テ言_ヲナリ一字ノ上ニテモヲシナメニ讀_{ヨミ}ツケテ
義ニ合ザルヲ多シ人々和讀ニテ習熟シ來レハ大概ニ解シ聞ユルヤウ
〔8丁表〕ニ覺ユレトモ推究ムレバ的切_ニ知_ニモノナシ姑_ク一ニヲ
舉_テイハバ以_ニノ字華音ニテ以_ニトヨミソノ以_ニアマタノ意義アリアマ
タノ語勢アリ文語解ニ載ル所ノゴトシ然ルニヲシナメ以_ニトヨミテ
モツテノ義ニ合ザルモノ多シ甚フシテハ可_シ以_ニ人_ヲ而_不ル_レ如_レ鳥
ニタモ乎ナド、大ニアヤマル可以_ニ二字ニテ語ヲナス_レ以_ニ人_ノ義ニ非_スタル又濟々タル多士文王以
寧_シヲ四子講德ニ〔8丁裏〕濟々乎多士文王所以_ニ寧_シトアリ此等ニ
テモ考知ベシ所以_コノユエト訓スレトモ是故_ノ義トハ又別ナリ又為_ニノ字ニ諸義アルヲ亦文語解
ニ出スタメナスナル等ト訓ジテ盡スニアラズ法華經ノ科註ニモ為
ノ諸義ヲ分釋セリ考見ルベシタメノ義去声ニ分_テトモ後世ノコニテ古文ニハ無_レナリ畢竟ソノ義相通ズ其它ノ声音ヲ分_ツモノ
皆_シ又動ノ字語解ニ事必之辭ト釋ス此ニテ意義ヲ按ズベシ俚語ノイ

ツ〔9丁表〕デモノ義アリマタシテハノ義アリツヒト云義アリ因テ
ツ子ニ。スナハチ。ヤ、モスレバ。ノ三譯ヲ以テ畧ワカル然モ融
通シテ味ヒ知ベシ一語ヲアテ、片付ガタシ又與ノ字温太真與ニ揚州
淮中ノ估客〔二〕檣蒲ス與ニ輒不レ競^世コレ温力不レ競ヲイフナレバ
トモニト讀テ聞エズ^{與ハカ、リ}又臨濟云與^ニ我過シニ禪板ヲ一來レ龍牙
便過シテ^ニ禪板ヲ一與^ニ臨濟^ニ^{本録並}上ノ〔9丁裏〕與ハニノ義ナリ下
ノ與ハアタフト讀トモ義ニ非ス通雅ニ以レ物予^ル人ニ曰レ過トトア
リ過渡ノ義ニシテ俚語ノワタスト云ニ同シ宮人手裡^{ヨリ}過^スニ茶湯ヲ一
ト云古句アリ^{ワタス}過^三禪板ヲ於^ニ臨濟^一ト云意ナリ與於ソノ音アヒ近シ
文語解ニ此^{義ヲ辨ス}此類ミナ倭訓ノ屈ザル所ニシテ中華ノ音讀ニテハ自然ト
語脉通曉スルコナリ推シテ考知ベシ〔10丁表〕
○畑ヲケムリトノミ訓ズレドモキリカスミノ義ニ通ス霞ヲカスミト
訓スレトモカスミハ靄ナリ霞ハ日ノ餘光ヲ云洞霞飄^スニ素練^ヲニ等ハ
雲ノ義ニ通ス風ヲフクカゼトノミオモヘドモ春風秋風風景風物風光
ミナ氣候ライフコ多シ凡テ氣象ノ動發スル所ニ就テ形容スルノ義ナ
リ故ニ人物ヲ称スルニモ風神風格風期風標等ト氣象ノ上ニ〔10丁裏〕
テイフ辞ナリ然ザレバ死物ヲ形容スルニナルナリ悲哀ノ字ヲカナシ
ム愁ノ字ヲウレフトノミ訓スルモ皆ツクサズ^{詩語解ノ題引}夫中華ノ
語義ハ多ク日本ノ語義ハ少シ故ニ此方ノ一語ヲ數字ニアテ或ハ數義

二混ズル（はなはだ） 太 オホシ然トモ事實ノ字義ハ考知ヤスシ虚字助語
二至テハ尤知ガタシ字書トイヘドモ大概ニ注スルノミ（11丁表）
字ゴトニ一義アレバ某ハタ也ト注スレドモ直ニ同ナルニハ非ス六
書故ニ凡文各々有レ義以レ彼ヲ喻スレ此終ニ不ニ親切ナラ一説文ニ依倚互ニ相
釋ス 依ハ倚也ト注シ又 倚ハ依也ト注ス 此ノ類甚多シ取ニ諸ヲ近似ニ一而已トイヘリコノ故ニ
字書ニテ其近似ヲ考ヘ然シテ後マタ細審ニ究明スベシ詩語解ノ題引ニ
六法ヲアグ其ノウチニ古語ヲツキ合セ比例シテ考知ルヨリ要ナルハ
ナシ故ニ文語解（11丁裏） 詩語解トモニ古語ヲ引列シテ喻スコヲ重
トス典籍ヒロキコナレバ學者猶尚考索シテ各發明スベシ
○二字連用スル時語意轉ジテ一字ギリノ義ニ拘ザルコトマタ多シ亦ハ
旁及之辞ト注スレトモ不亦ト連用スルトキ不ニ亦君子ナラ一乎不ニ亦惠
スレトモ 而不ニ一レ費乎ノ類旁 及ノ義ニアツカラズ古來無為ヲアジ
キナシ（12丁表） トヨミ不屑ヲモノ、カズトモセズトヨミ加之加以
至若ヲシカノミナラズトヨム皆コ、ロアル倭訓ナリ無為ハムヤクナ
リムヨウナリト云意不屑ハ心ニトンヂヤクセヌ意ナリ加之加以至若
ハソノウエニマタト云意ニテ語勢下ヘカ、リ穩順ニヨミガタキ故シ
カノミナラズト二字ニテ讀キルナリ又母寧母乃 母無ト 通ス 亡其得無將
〔12丁裏〕 無將不一字ノ訓ハ各別ナレトモ二字連用シテ大抵同意ナ
リ故ニ綱目集覽ニ將無ハ猶下言ニ無乃得無ト一之類ノ上意以ニ為是ト一而

未^ニ敢^テ自主^{タラ}一也ト釋セリ大抵ミナ一ニテハアラズヤト婉曲ニイ
フ辞ナリ俚語ノ一ニテハアルマヒヤト云ニ同シ

天其以^レ礼悔^{マハ}禍^{スルコトヲ}于^レ許無^ニ寧^ス茲^ノ許公復奉^{スルコト}其社稷

左傳隱十一年正義ニ無寧ハタ也ト注スレ 居^テ簡^ニ而^{（13丁表）}行^レ簡^ヲ

母^ニ乃大簡^{ナルニ}一乎 亡^ニ其言^レ臣^ヲ者將^タ賤^{シテ}而不^ストスル^ニ一レ足

秦策注ニ亡其 籍^{スニ}人^ニ以^{スレ}此^ヲ得^{シテ}無^レ危^ヲ乎 此ノ君

小異^{ナリ}得^ニ無^ニ是^{ナルニ}一乎 拍^{シテ}孟嘉^ヲ一曰、將^ニ無^ニ是^{ナルニ}一

如^ハ此^ノ將^ニ無^ニ歸^ニ一 觀^レハ君^カ所^ヲ一レ言、將^ニ不^ニ早慧^{ナリシニ}

一乎 融傳 讀法ハ一定ナラザレトモ意義ハ畧同シ又得^{シテ}無^レ諸

君是其苗裔^{ナルコト}一乎 將^ニ無^ニ是^{ナルニ}一乎ノ類無^ニ一字ニテハ置^レ

ザル所ナリ連用シテ語意ノ轉ズルヲ見ベシ（13丁裏）

又不須不煩不勞不假ノ類本義各別ナレトモ二字連用スル時ミナ不用

ノ意トナル

不^レ煩^ニ復^ル一^七 何^ッ假^シ南^ニ一^三 面^{スルコトヲ}百城^ニ一^十 若思^テ不^ハ

能^レ得^レ「便不^レ勞^ヲ讀^レ書^ヲ」 青史無^レ勞^ヲ數^{ルニ}趙張^ヲ一^杜 青

春^ニ不^レ假^ス報^ス一^同 喬木若存^{セハ}可^{シヤ}假^レ花^ヲ 不^レ須

ハ詩ニ多用ユ又不用不須モチヒズト讀トモ不^レ為^レノ訓トナル所多

シ（14丁表）

又不^レ悟^レ不^レ意^レ不^レ寤^トモニオモハザリキノ義ニ用ユ

不^キ意永嘉之中復聞^{ントハ}正始之音^ヲ一^{世說九注ニハ}不^キ悟更^ニ以為

不^キ意永嘉之中復聞^{ントハ}正始之音^ヲ一^{不悟ニ作ル} 不^キ意永嘉之中復聞^{ントハ}正始之音^ヲ一^{不悟ニ作ル}

コノ類太多シ推テ考知ベシ然モマタ異中ニ同アリ同中ニ異アルヲ

知ベキナリ

○克ノ字ニヲサムノ義カツノ義ヨクスルノ義（14丁裏）須ノ字ニモ

チユルノ義モトムルノ義マツノ義コノ類ソノ文句ニツキ重ナル義ヲ

取テ和訓ヲツクレドモ華讀ニテハ須^{シユイ}トヨミ克^ケトヨミテ數義ヲ合^フ

多シ此類マタ少カラズ倭讀ノツクサバル所ヲヨク辨別スベシ

以^ノ字

二字ノ義ヲ帶^タタ

ルモコノ類ナリ

○聲音ハ先ニシテ文字ハ後ナリ故ニ字義ノ音ニアツカルヲ尤多シ音

韻ヲ考ヘテ字義ヲシルヲ（15丁表）第一ノ工夫ナリ音同レハ義通ジ

音近レハ義近ク音轉ズレバ義轉ジ音反スレハ義モ反ス華音ヲ能セザ

ル人モ平仄清濁輕重緊緩等ノ音韻ニヨリテ輕重死活抑揚平險ノ語意

ヲ考知ベシ六書故ニ偏頗依倚聲義近^{シテ}而微^シ一^{不^レ同^ヲ頗^ハ甚^クレ於^リ}

レ偏倚ハ力アリ^レ於^リレ依察^{シテ}二聲之廣狹輕重^ヲ一義可^レ知也トアリ胡惡何

曷焉安ノ類ミナ喉音ニシテ差別アリ乃載焉然ノ類（15丁裏）音異ニ

シテ韻同シ又也ト矣ト俱ニ喉音ニシテ也ハ意平^{ニシテ}而盡^ク矣ハ意直^ニ

シテ而疾^{シト}注^ス也ハ音ヒロク出ツ矣ハ音ホソク出ツ故ニ其義自然ト

響ニアラハル天地之道高也明也

中 道ハ則高矣美矣

孟 二ノ語勢ミ

庸

ルベシ耶ノ字也ノ音ニシテ平聲ナリ轉シテ決セザルノ辞トナル 乎哉

ハ義 焉ノ字同ク喉音ナレトモ平声ニシテ響 ヒ、キ 異ナリ下ヨリウケノス ヨリ

ル意〔16丁表〕アリ故ニコレヲコヽニコレヨリト訓スルコトモ多シサ

レドモ之是等ノ字ヲ用ルトハ別アリ至 テ 于 ニ 應 シ 天 ニ 順 レ 人 ニ 其揆

一ナリ焉 王命 先聖後聖其ノ揆一也ト同語同義ナレトモ音響別ナレハ

語勢モ別ナリ也焉矣ノ三モト明白ナレトモ倭人會得セズシテ但一句

ノ下ニ看合セテ置ヤウニ心得テ謬用ルコト尤多シヨク工夫ヲ着ベシ助

辭ヲ置字ト呼ヲ以テソ〔16丁裏〕ノ等閑ナルコト知ベシ

○凡助語ヲ用ルニコノ字ト定テ他字ハ用ユベカラザル所アリ又他字

ヲ用テ字義ハチガエトモ句意イヅレニテモ通ズル所アリ又意義ハ同

レトモ語勢ハ異ニシテハヅムトハヅマザルトアリ又古文ノ句ヲ用ユ

レトモ上下ノ語勢ニ因テ助字ヲカユベキ所アリ又文勢ヲ急ニセント

欲テアル〔17丁表〕ベキ助語モハブク所アリ文勢ヲ緩クセントシテ

無テモスム助語ヲ入ル所アリ又語句ノツリアヒニ因テ二字連用スル

所アリ 俾令使令俗語ノ
放教ノゴトシ 皆ヨク考ヘ知ベシコノ外古今ノ異アリ雅俗ノ

別アリヨク辨別スベシ文語解ニ大概ソノ例ヲ舉載タリ

○徂來ノ學則ニ吉備公ノ和訓ヲ作りシコトヲイ〔17丁裏〕ヘリ證據モ

ナキ虚妄ナリ和訓ノコト上ニ言ルガ如シ近來宇士新和訓ヲ改テ縁譯ト

名ケ文義ヲ考ヘ和語ヲ正シ經書ニ附ラレキ然ルニ世上舊來ノ倭讀ニ

口熟シ耳熟スル故却テ士新ノ譯ヲ奇僻ナリトシテ用ヒズ或ハ日本ノ

雅語ヲ害スナドヽ云テ詆ル者アリ此士新ノ本意ヲ知ズ文理ニクラキ

故ナリ中古以來一概ニ和訓ヲ混ジ而〔18丁表〕ハシカフシテ則ハス

ナワチ以ハモツテ其它ミナ此ノ通りニテ諸義ヲ辨別スルコトナシ故ニ士

新ノ縁譯華文ト倭語ヲツキアハセ其意義ヲ分理シテ喩ラシム初學工

夫ヲツクレバ文義ヲ發明スルノ利益オホシ取觀等ノラル將請等ノベ

シ使向等ノモシ況ノマシテ為ノヨル凡コノ類ミナ本義ニカナヘリ嘗

ノアリ今ノモシ本義ニハ非レトモ〔18丁裏〕嘗ハ過 キ 去 リ シコトヲイフ

義ナレハ一セシコトアリト云義ニアタル 嘗ヲカツテ讀ノ訛
文語解ニ委ク辨ス 今ノ字設

テイフ辞 モシ 今有 シ 少卒暴 ニ 起 ル 一 子 與 ノ 類ミルベシ嘗ヲ有ノ義ニアテ

今ヲ若ノ義ニアツルニハ非ス縁譯トイヘトモ一々ニ的切ナルニ非レ

トモ舊讀ノ泛漫ナル二十倍シテ文義ヲ開發スルノ功ハナハダ多シ然

レトモ畢竟魚兔ヲ得ルノ筈蹄ナレバ必シモ〔19丁表〕讀法ヲ改ベシ

トハイハジ士新ノ學法モ古代ト同ク讀書ハ華音ト立ラレキ然トモ世

上ミナ音讀スルコト能ザレハ倭讀ノ聲ニテ大概節奏モヨク口耳ニモ順

穩ニ吟誦ニモ佶屈ナラズ記憶ニモ便利ナルヲ要トスベシ文理ヲ知ニ

至テハ徂來ノイヘル口耳不 レ 用心 ト 與 レ 目謀思 テ 之 又 思 フ 神其通 セ 之 ニ

誠ニ學文ノ格言ナリ〔19丁裏〕

○日^{イハク}イヘラクヲ切シテイ^{ノ玉ハクヨロシクスベカラク}スベテクト云ハ後ニイフベキヲ前ニハクトナリシナリ^{日宜須}イフ辭ナリオソラクウタガフラク子^{カハククユラクノ類ミナ是ナリ曰フニ}先イハクトイヒ須^ニニーストイフヲ先スベカラクトイフナリ須^{ノ字義ヲヨク考タルモノナリ今朝廷ノ文ニ}宜須^{ノ字マアリテ皆カク讀フナリ然ニ世上ニ}須^{クニタミツミヒト}國人罪人并ニ上ニ引ル無為ノ類ミナ^{アジキナシ}一スベシトカヘリ讀ハ文盲ナリ

古代和訓ノコトバニシテ語意モ穩順ナリ中古ヨリ展轉シテアヤマリ意義ニアタラヌ訓又多シ各考テ取捨ス^{〔20丁表〕}ベシ

○助字ヲ用ル^ルヲヨク常法ヲ知タル上ニテ活法アル^ルヲ知ベシ正法アル^ルヲ知タル上ニテ奇法アル^ルヲ知ベシ姑ク一二ヲ舉テイハ^{然レトモ而趙之地不シテ}二歳^ニ危^一而民不^ニ歳^ニ死^一而^{シテ}魏之地^ハ歳^ニ危^一シテ而民歳^ニ死^一スル^{コトハ}者何也^{魏策}此^レ四ノ而ヲ連用シテ語意轉換セリ談者有^ニ悖^テ於^レ目而怫^ヒ於^レ耳謬^テ於^レ心而使^{ナル}於^レ身者^一或ハ有^ニ悦^{シテ}於^レ〔20丁裏〕^レ目而順^シ於^レ耳快^{シテ}於^レ心而毀^レ於^レ行者^一非有^ニ先^一此而ノ字ヲ四語ニ^{クハリ}配テ意ハ末語ニテ轉ズ而今^ニ而後吾知^レ免^ンヲ夫^{語論}此上ノ而ハタゞ發聲下ハ而後二字ニテシテノ意ナリ^{スベテ而後ト用ル寸(ミ)後(フ)ト}

云義ハナキ^{古書}禮煩ナル則ハ乱ル事^ルモ^{神ニ則難シ}命^{君子不レ重則ハ不威學モ則不レ固}語^{コレ礼煩則ハ亂ル礼煩則ハ事^ルレ神ニ難君子不レ重則ハ不威アラ不レ重則ハ學不レ固トイフ意ヲカク云ナリ實熟^{スル}則ハ剝シ則^{〔21丁表〕}辱^ス莊^子ニノ則トモニ實熟ノ語ヲ承ルナリ此類ミナ活法トイフベシ關石和鈞王府^{ニ則有^リ五子}今是大鳥獸則失^{ヘハ}其^ノ群匹^ヲ越^レ月^ヲ踰^{テモ}レ時^ヲ焉則必反巡^シ過^ニ其故郷^ヲ一云々^{三年}何^ソ可^シニ}

而^モ適^ス一乎^{龜策傳コレ得テ而一ト云ト同語勢ナレトモ可}故^ニ言^フ而^レ非^ラ一^レ而^ノ例ハスクナシ又倭讀ニテハ同様ニヨマレズ^{辨命論コレモ辭ヲユルメテ言而一ト置ナリ直下ニ音讀スル寸ハ得而モ可而モ言而モ語法ハ異ナラズ和訓トナス時大ニ別ナル様ニ}家有^{レハ}千里^一驥^一而^モ不^{〔21丁裏〕}レ^{珍トセ}焉人懷^ハ盈尺^一オモハルナリ^{文選コレ家々人々ニ名馬名玉アラバ名馬名玉モ珍貴トスルニ足スト云ヲカク造語ヲ巧ニスル也}並ニ奇法ナリ此ノ外枚舉スベカラズ助語ニ限ラズ凡テ文字ヲ活用奇用スル^古文ニ太多ク莊子等ニハ尤多シ^二乎^一而人ノ善^{スル}ヲ^レ之^ヲ斬^ニ乎^一而人ノ不^{〔レ}善^レ之^ヲノ類往々ニアリ考ベ^{〔原文ママ〕}知ベシ近世古文辭ノ風ハヤリ常法正法ヲ諳ゼズシテ奇變ノ語ヲ好テ用ル^ル跛^者ノ輕^{〔22丁表〕}態^ヲ學カコトシ笑ベシ戒ベシ

○文章ニ字法句法章法篇法ト云^フアリ此ノ方^方和讀ノ敝ニテ句法ニク^クラク顛倒ヲ免レガタシ東涯ノ用字格初學ノ為ニ甚益アリ校看スベシ顛倒ニ知ヤスキアリ知ガタキアリ雖ノ字所以ノ字ナド顛倒ナラズト置テ却テ顛倒ナル^フ作者トイハル、人ニ多ク見ユ又不^ニ我^ヲ遐棄^セ一^{人莫^ニ之^ヲ知^一〔22丁裏〕}不^レ恤^ニ人之我^ヲ欺^ヲ不^レ患^ニ權之我^ニ偏^ル一^ノ類古來ノ文法ニテ倭讀ニテ却テ顛倒カト思ル、^フ多シ又之ノ字是ノ字ニテ上ニ置ベキ語ヲ下ヘ移ス^フ多シ論語ノ非^{シテ}夫^ノ人之^ニ為^ニレ^レ慟^ヲ而誰^ニ為^シメト訓ズヘキニ非ス^{荀子ノ文王之為^レ子ミナ此義ナリ又正法ト奇法トアリ不祥莫^レ大^{ナル}ハ^レ焉}ハ正法ナリ^孟莫^ニ不^一祥大^{ナル}ハ^レ焉^{ヨリ}ハ奇法ナリ^左竊^ニ為^ニ先生^ノ不^レ取也トアルベキ

〔23丁表〕ヲ竊ニ不下為ニ先生ノ一取上^也也 非有先生論 トアリ山ノ者ハ不レ使^レ居^レ川ニ不^レ使^三渚ノ者ヲシテ居^二中原ニ^一 禮運 上下語ヲカエテイヘリ殊ニ奇法ナリ然モ古文自然ノ奇ニシテ後世ヨリ法ト称スルナリ又今人ノ手ヨリ出バ顛倒錯置カトオモハル、程ノ語アリ告^三尔百姓^二于^一三朕^カ志^一 盤庚 北面シテ周公立リ焉 金 子能必使^三三來年^二秦ヲシテ之不^二復攻^一レ我ヲ乎 平原君傳 素ヨリ悍勇而輕シ^レ齊ヲ齊ヲ號シテ為^レ怯^ト 孫吳傳 此^レ子三ノ者皆出^二吾下^一ニ 〔23丁裏〕 同 此類ナリ得^レ無^レ「ヲ」ニ諸君是其^レ苗裔ナル「一」乎 世^一朗^一 王^一之學^レ華^一 一 皆是形骸之外去^{コト}之所^一ニ以^レ更^二遠^一キ^一 同 コノ類モ常語ノ例ニ非ズ吾有^二羊上林^一ノ中^一 平準書 有^二ニ在^一ヲ含マセタルモノナリ此類ミナ意ヲ着テ看ベシ等閑ニ摸倣スベカラズ

○日本人ノ文章ヲ學ニ語意脉絡ノ融通圓熟シガタキ所ハ論說ストモ盡サジ但一字ノ上ニテモ 〔24丁表〕 意味ニカハル「一」ニ憶出スルマハニ此ニアグ夫如^{ナレハ}是^ノ也為^レ「^レ物甚衆ク為^レ己甚寡^シ 運命論本文ニ就テ委ク」
ミル ベシ コレ求ル所ノ財物ハ限ナクシテ己力受用ハ尽サヌ「ヲ」論ズ物ハ甚衆ク己ハ甚寡シト云テモ聞ユレドモ「ノ」為^レ字ニテ意味ヲ備ル「看ヘシ咫尺之内便覺^フニ萬里^{ナル}為^レ「^一遙^世 說」コレ畫面ノ妙ナル「咫尺ヲ萬里ノテイニスル意味ヲ為^レ字ニテ見セシムカヤウ 〔24丁裏〕」ノ處等閑ニ讀テ文意ヲ盡サズ故ニ自己ニ書トキ辭トゞキ難シ古文ニモ一字ニ意ヲ用ル「ヲ」說テ夏小正^ス鷹則為^レ鳩^トノ下ニ善變シテ而之^レ仁^ニ

也故^ニ其^一ノ言^レ「^レ之也日^レ則^ト盡^スニ其^一辭^一」也鳩為^レ鷹ト變而之^ニ不^レ仁^ニ也故^ニ不^レ盡^ニ其^一辭^一「也トイヘリ此ハ一義ノ說ナレトモ總シテ一字一語義意ノ等閑ナラザル」推テ知ベシ然トモ初學ノ人作文ニ臨テ字ゴトニ穿鑿シ句ゴトニ 〔25丁表〕 吟味ストモ穩當ナル「ヲ」得ガタシ唯ヨク中華ノ文字ヲ習讀シ工夫ヲ用テ優柔厭厭スレバ自然ト融會スベシ

○春秋僖十六年ニ隕^ニ石^一アリ于^レ宋五^ツ 公羊傳^ニ曷^一為^レ先^ニ言^レ隕^一而後^ニ言^レ石^一隕石ハ記^ス聞^ラタ^ニ其^一碩然タルヲ「視^レ之則^ハ石察^レ之^一則^ハ五トアリ又左傳注ニ莊ノ七年ニ星隕^テ如雨^{フル}見^ニ星^一之隕^テ而墜^ルヲ「^レ於^ニ四遠^一若^ハ山若^ハ水不^レ見^ニ在^レ地^一之驗^一」此^ハ則^レ見^ニ在^レ地^一之 〔25丁裏〕 驗「一」而不^レ見^ニ始^メ隕^ル之星^一「ト云リ此星隕ト隕石トノ語法ヲ明セリ又夏小正^ニ正月^ニ雁北^ニ鄉^一 〔むか〕」先^ニ言^レ雁^一而後^ニ言^レ鄉^一者^ハ何也見^レ雁^一而後^ニ言^レ雁^一 〔後數ルニ其鄉^一フ^一也九月^ニ遷^ニ鴻雁^一 〔ユク〕先^ニ言^レ雁^一而後^ニ言^レ雁^一 〔何〕也見^レ雁^一而後^ニ言^レ雁^一 〔後數ル^レ之^一則^ハ鴻鴈也コレモ同語法ナリ又古戰場文ニ降^セン矣哉終^ニ身^一夷狄^ニ戰^ハン矣哉骨暴^サンニ沙磧^ニ終^ニ身^一ト云ハ熟語ノマハナリ下句ハ戰死シテ骨サレト云語ナリ又魚行ハ水濁リ鳥飛ハ落^ツ 〔26丁表〕」レモトイフ語アリ上ハ魚行水ト順語ナリ下ニ落毛トイヘルハ空ヨリ先^{マツ}ヲツル躰ミヘテ視^レハ毛ナリ 亦毛落トアル處モアリ 此ノ類下ス^レ字^一ヲ先後ヲ見ベシ中華ニテハ自然ノ語勢ナリ日本ニテハ順逆ニ訓讀スルユヘ却テ工夫ノ着ザル「多シ

○日本人ノ文ヲ學フ古今高卑ノ文跡ハ姑ヲキ先中華ノ言語ニナリ得_レ切要ナリ中華ノ人〔26丁裏〕ハ文不文ニヨラズ日用ノ事實ヲ叙ルニ天然自由ニヨク形状ヲ尽シ情由ヲノブル_レ此ノ方文章者トイハル_レ人ノ及トコロニ非ス秦漢古文ノ妙處ニ至ルニ比_{クラ}ブレハ難_レニ非レドモ學者ノ志浮虚ニシテ工夫着實ナラザル故ナリ古文今文雅文俗文ニヨラズ凡書籍ニ事實ヲ紀セル所ヲヨク看閱シソノ名称ソノ叙致ヲ委シク記憶シテ〔27丁表〕吾方筆端ノ援助トナス_レヲ要トスベシ

○前年朝鮮人ト接遇セシニ彼方ノ人ハ詩ヲ作ル_レナラヌ者モミゴト筆談ヲナス此方ノ人ハ大概詩ヲ能シテ朝鮮人へ贈ルホドノ者モ筆談ニ至テ一向マハラズ學文ノ初入チガヘル故ナリ日本ノ人オハ詩道ニ近シテ學文トイヘバ先詩ヲ作ル_レ重トス故ニ大抵詩ヲ具ルモノ一首ノ〔27丁裏〕詩ハ章ヲ成テ出セトモ題言スコシ長レハ拙陋ヲ免レズ具足セザル_レ耻ヘシ

○東坡ノ與_ルニ黄魯直_ニ一書ニ凡人文字當_ニシ_ニ務_テ使_ニ平和_{ナラ}一_ニ至足之餘溢_テ為_ニ恠奇_ト一_ニ盖出_レ於_レ不_レ得_レ已_ヲ也トイヘリ此文ヲ學モノ、要訓ナリ近世ノ文風菁華ヲ尚ヒ菁華ヨリ轉シテ奇巧ニワシル詩モ文モ情ノ條暢ヲ外ニシテ辭ノ結構ヲ重_{オモ}トス古詩盛唐ニ自然高妙〔28丁表〕ノ調アル_レヲ知ズ俚俗ニイフ道具_ヲダテノ作意オホシ初心ヨリ道

具_ヲダテノ作意ヲ重トスル者ハ詩モ文モ決シテ成就スル_レ能ハズ學者ノ病患フカク戒ムベシ

○凡ソ詩道ヲ學フモノハマヅ詩ハ聖人ノ一教ナル_レヲ知ベシ其_ヲ為_レリ人也溫柔敦厚_{ナルハ}詩_{ニテ}教_ル也トアリ温ハ氣ノムツクリトシタル_レ柔ハヤハラカ〔28丁裏〕ニシテギゴハナラザル_レ敦厚トモニアツシト訓シテ輕薄ナラザル_レナリコレ人情ニモトラズ礼義ニソムカザル意味ニシテ實ニフカキ教旨ナリ凡ソ人トシテ無情ナルモノハナク其深く厚キ_レ鳥獸ヨリ甚シ鳥獸ノ飲食ハ唯目ニフレロノヲヨブニ就ノミ人ハ種々ニ其美ヲ好ミ品數ヲトリアツメ製法ヲ巧ニシ烹調ヲ考ヘ汁ニスヒク〔29丁表〕チ膾ニケンナド云テ膳部ノカサリ程限アル_レナシ男女ノ上ニテモ様々ニ美麗ヲ好ミ色ニ惑ヒ情慾ニ溺ル_レ鳥獸ノタゞ雌雄牝牡ノ意アルトハハルカニ異ナリ然モソレ故ニ又男女ノ別ヲシリ不義ヲナサズ行儀ヲツ_レシム_レ鳥獸トハルカニ異ナリ飲食ニヨゴル情アル故ニ又飲食ノ分量ヲシリ作法次第ノ礼ヲシル狗猫ノ〔29丁裏〕淨穢ヲモ分タズ直ニ口ヲツケ鼠ノ直ニ牙ヲサシコムトハ遙ニ異ナリ是ヲ以テ人ノ鳥獸ヨリ情フカフシテ鳥獸ヨリ性タ_ハシキ_レ知ベシ聖人ノ教ハ性ノ正キニ歸スルヨリ外ハナシ就_レ中詩ノ教ハ情ヲソダテ欲ヲヤブラズシテ道ビクノ理ナリ譬ハ父母ノ子ヲ教育スルニツヨク呵責スルノミニテハ却テヒガミクセヅク_レアリ柔軟〔30

「丁表」ノコトバニテタラシソダマギラカシナドシテオトナシクス
ル理甚アルヲナリ故ニ歡樂ノ情ニテモ悲愁ノ情ニテモ酒色ノ興ニテ
モ詩歌ノ詞ニアラハシ咏吟ノ音ニ發スルトキハ自然ト優ヤサシクヤウラギノヒ柔和ヤサシクヤウラギノヒ暢
シテ放蕩煩惱ノコヽ口移リ化スルヲナリ閑雅ハ哀而不傷樂而不淫
トノ玉ヘルモコノ意味ナリ譬ハ飲食ヲ淨クトヽノへ膳部ヲ飾（30丁裏）リソナユル時ハ鄙劣ムサボリック饕餮ノ心オノヅカラ化シ佛神ヘモソナ
ヘ賓客ヘモスヽメ氣象モ快クナルヲ自然ノ道理ナリ

○詩ハ性情ヲ述ル者也ト古ヨリイフヲナリ性ハ生也ト訓シテ人ト生
レテ人ラシキ心ライフナリ故ニ詩ハ事實情ヲノブルヲナレトモ其
人ニ相應セズ道理ニカナハザル事實情ハ述ベカ（31丁表）ラズ然
レバ喜ベキ道理ナラバ喜バヌ心ニテモ喜ノ辞ヲノベ哀ベキ道理ナラ
バ哀マヌ心ニテモ哀ノ辞ヲノブルヲ却テ性情ヲ述ルノ本旨ニカナフ
ナリ此マタ詞ニアラハス所ニ於テ性情ヲタシナム一ノ教トナルベシ
譬ハ僧ノ酒ヲ好モノモ詩中ニ酒ヲ飲（31丁裏）ヲイハザルハ不相應ノ性情ナ
レバナリ儒ノ佛法ヲキラフ者モ僧トマ（31丁裏）ジハリ寺院ニ遊ト
キハ方外ノ情ヲ詩中ニノブルヲハ詩ノ道ハ人情ニ順シテ見識議論ヲ
立ル者ニ非レバナリカヤウノ處ニテ詩ノ道詩ノ教タルヲ知ベシ
○詩三百一言以蔽サタム之ヲ曰思無邪トノ玉ヘル邪ハ邪僻ノ義ニシテ
ヒガミワルグセノ意ナリ宋儒ヨリシテ詩三百篇ヲ勸善懲惡ノ教トナ

スハ甚アヤ（32丁表）マレリ勸善懲惡ハ法刑ノ上ニアルヲ詩ノ教旨
トハ大ニ別ナリ其ヨリシテ三百篇ト後世ノ詩トニ差別ヲナシ能言詞
章ヲ無益ノ學ナリトイフ皆偏見ノ論ナリ

○今時ノ詩ヲ學ブ者タゞニ藝能トコヽ口エ此ヲ以テ才學ニホコリ一
時ノ名聞ニソナエ人ト唱和スルモタゞ勝負ヲアラソフ如ニオモヘリ
「32丁裏」大ニ詩教ノ旨ヲ失フ又風雅ノ弊ヨリ放逸ヲ長ズル者多レ
ハ能言詞章無益ノ學ナリトイフ咎メモ免ガタシ然トモ皆詩教ノ本旨
ニ達セザル故ナリ

○三百篇ヨリ以來文運世態トウツリ終ニ唐詩ノ躰トナリ皆コノ躰ヲ
重トス造語聲律ノ法ハ大ニ變ズレドモ溫柔敦厚風人ノ旨ハ異ナラズ
晚オモ「33丁表」唐ヨリ宋ニ至テ詩ノ趣向意巧ヲ主トナシ終ニハ議論見
識ノ理ヲ詩ニアラハス様ニナリ詩教ノ本旨ヲ失ヘリ故ニ作者ハ唐ヲ
尚ヒ唐ノ中ニ又盛唐ヲ尚フヲナリ

○詩ニ體格風調韻ト云（33丁裏）アリ初學ノ者ソノ義ヲ會シガタク會ストイ
ヘトモ解説シテ人ニ訓ユルヲ難シ故ニ此ニ大概ヲ言テコレヲ喻ス體
ハ形（33丁裏）躰ナリ古詩ノ躰唐詩ノ躰又律ノ躰絶句ノ躰等トイフ
其義シルベシ格ハ品格ノ義高下等ノ定リテクルワヌライフ人ニテ言
ハ公家ハ公家ノ格大名ハ大名ノ格士大夫ハ士大夫ノ格アルガ如シ又
道德才氣ノ上ニテモ人品ノケダカキ所ライフノ類ミナ格ノ義ナリ盛

唐之格格ノ高ハ似^ニ梅花^ニ等ノ語ミルベシ風ハ風流風儀ノ意公家ハ公
〔34丁表〕 家ラシク大名ハ大名ラシキ所アルカ如シ古詩ノ風唐詩ノ
風宋元ノ風ト云ノ類ミナ觀察スベシ調ハ歌曲ノシラベ本音ト、ノフ
ノ義ト相通ス和合也又揉伏也ト注ス揉伏ノ義ヨク思ベシ人ニテ言ハ
行儀シトヤカニ俗ニイフ^{タハミ} 置^{ヨキ}ザワリノ善ナリ詩ノ平仄聲律ミナ調ニ
カハル其上ニ情意語辞ヨクト、ノヒ盛唐ノ語ラシク中晩ノ〔34丁裏〕
語ラシキハ皆調ナリ韻ハ音響ナリ本曲節ニ就テイフ義ナレトモスベ
テ趣味ノコニカハル人ニテ言ハマジワリハナシナドスル上ニ情趣ア
ルガ如シ故ニ無風雅ナル人ヲ不韻トイフ古人ノ詩評ニ採^ニ菊^ヲ東籬ノ
下^ニヲ格高^シトイヒ池塘生^ス春草^ヲ韻勝^ルトイヘリ又書ノ評ニモ
文徵明^ハ以^レ格^ヲ勝^レ王履吉^ハ以^レ韻^ヲ勝^ルトイヒシコアリ按知スベシ又
器物ヲ〔35丁表〕 以テ譬^ンニ其々ノ道具トナルハ躰ナリ上品下品イ
ナカ細工京細工ナトイフハ格ナリ雅器ハ雅器俗器ハ俗器ラシキハ風
ナリ細工ノ能ユキトゞキタルハ調ナリ物ズキノヨキハ韻ナリ凡テ細
工スル者モ目利^{メキ}スルモ此意ヲ會得セザレバナラヌコト詩ノ道モ亦カク
ノ如シ雅意ヲ會セザル者ノ細工ハ自然ト俗態ヲ免レズ詩道ヲ知〔35
丁裏〕 ザル者ノ趣向ハ自然ト雅思ニカナハス此精細ニ稽古シ工夫ヲ
著ベキ所ナリ體格風調韻ヲ分テイヘバ右ノ如ナレトモ五ノ意義マタ
融通シテ看ベシ

右初學ノタメニ文章ノ初歩詩道ノ大意ヲ説ク此ヨリ以上ハ古人ノ評
論ニ存ス文章軌範初學ニ便アリ陳騷カ文則ヨク古躰ヲ論ス其ノ它諸
家〔36丁表〕 文法ヲ論ズルモノ太多シ惺窩先生採集シテ文章達德錄
ヲ著スソノ内性理家ノ論科場家ノ説混合シテ取ベカラザルコト多レ
トモ一遍涉獵セバ初學ニ於テ益多シ王弼州力藝苑卮言詩文トモニ論
ス滄浪詩話元瑞詩藪ナド詩論ノ精當ナルモノ也詩ヲ學モノ第一ニ看
ベキナリ

文章軌範ニ放膽小心ノ二科ヲ立タリ王元美ノ〔36丁裏〕 論ニモ文章
ノ枕竅不^レ過^ニ放膽小心ノ二端^ニ一何也文非^レハ^ニ小心^ニ一識弗^レ沈^{ナラ}也非^レ
ハ^ニ放膽^ニ一氣弗^レ壯^{ナラ}也知^ニ放膽小心之説^ヲ一則ハ文章家思過^シ半^ニ矣
トイヘリ文ノミニ非ス詩ニ於テモ此工夫アルコナリ一句一字モ微細
ニ研尋スルハ小心ナリ全體ノ意向ヲ弘濶ニスルハ放膽ナリ書法ノ論
ニモ小心ニ布置^シ大膽ニ落筆^ストイヘリ推シテ言ハ凡ノ事業大ニテモ
小ニテモ小心放〔37丁表〕 膽ノニヲ具ユベキコナリ

寛政八^{丙辰}年 〔京都市木屋町二條 貝葉書院製本部〕 朱印〕

〔37丁裏・卷尾〕

【出典調査】

※ 訓読が原文に記載されていない資料は任意に施した。

1丁裏 「善道真貞ガ」云々

二十[目]

丁酉、散位從四位下善道ノ朝臣真貞卒ス也。(略)真貞ハ以テ三傳三禮

ヲ爲ス業ト兼ネテ能ク談論ヲ。但舊來不學ハ漢音ヲ、不辨ゼニ字

之四聲ヲ。至リテハ於教授ニ、惣用ユル世俗踏足〔蹠駁〕之音一耳。

情在リニ進取一、不レ能ニ沉寥スルコト。比ヒ及フ懸車ニ、被レ拜セ東

宮學士ニ。(『続日本後紀』卷15 承和12年(八四五)2月) 三伝は春秋左

氏伝・公羊伝・穀梁伝、三礼は周礼・儀礼・礼記。漢音は前代嵯峨朝

頃の新米音であり、旧音を呉音と称した。村岡良弼『続日本後紀纂註』

卷15 (近藤出版部 一九二二) 所引本文「不學漢音」の割注には「職員

令ニ大學ノ音博士二人、掌ル教フルコトヲ音。義解ニ云ク、明 經 生 ハ

必ズ先ツ就キ音博士ニ、讀ミ五經ノ音ヲ、然後講スレ義ヲ。」とある。『続

日本後紀』原文は一本により踏を踏とし、莊子「其道蹠駁」(雜篇・33

天下)によつて「蹠駁」(舛駁とも。乖舛駁雜の意。)と改めたとある(三上

参次他『続日本後紀』〔六国史のうち〕 朝日新聞社 一九三〇)。また、前掲村岡本

には「蹠駁」とし、割注に「玉篇ニ蹠駁。色雜リテ不レ同ジカ。御注孝經

序ニ云ク、近ニ觀ルニ孝經ヲ、舊注蹠駁尤甚シ。疏ニ踏ハ乖也、駁ハ錯也。」

とする。斑ら模様の意から純一でないこと。沉寥は寂靜。學問に沈潜しな

い意か。懸車は七〇歳。善道は公羊伝の権威とされたと他の箇所にある。

5丁表 「邯鄲ノ歩ヲ學ブタトエ」

且ッ子ハ獨リ不レ聞カ三夫ノ壽陵ノ餘子之學ヒシコトヲニ行ヲ於邯鄲ニ與。未ダシテ

レ得ニ國能ヲ、又失フニ其ノ故行ヲ一矣。直ダ匍匐シテ而歸ル耳。(『莊子』外篇・

秋水) 寿陵は燕の都。余子は丁年(成年)に満たない男子。燕国の若者

が趙の邯鄲の都人士の歩行を真似ようとしてかえつて本来の歩き方も忘

れ、這つて帰国した故事。趙の弁士(名家)の公孫龍が言語と觀察で莊子

を真似ようとしたのを、それは井蛙の類であり邯鄲の歩を習うものだと

魏公子に笑われた話。名家の惠施と公孫龍の主張はどちらも『莊子』に

記録されているという。『莊子』には他に墨家の記録も残っている。

6丁表 「徐禎卿力旅中ニ喪フレ女ヲノ詩ニ」云々

徐禎卿(明)「隴頭流水歌 三疊代リテ内ニ作」其一「隴水鳴咽シテ流ル、各

自リニ東西ニ下ル、生ミテモ男ヲ不ルニ下ロサレ堂ヲ、生ミテ女ヲ棄ツニ中野ニ。」

(略)其三「隴水鳴ッテ不レ止マ似シ聞クガニ阿兒ノ語ヲ、出デテ門ヲ不レ見レ

人ヲ肝腸斷ニ絶ス汝ニ。」(徐禎卿『迪功集』卷二) 内は内人、妻。

7丁表 「論語ノ先行其言而後從之ノ文」

子貢問フニ君子ヲ。子曰ク、先ニ行ヒテ。其ノ言ハ而シテ後ニ從フレ之。(『論語』

為政) 君子ハ博ク學ビテ而辱サク守リレ之ヲ、微シク言ヒテ而篤ク行フレ之ヲ。行ヒハ

必ズ先チ言ハ必ズ後ル人ニ。君子ハ終フルニ身ヲ守リテ此ヲ悌悌タリ。(前漢)

戴德『大戴礼記』49「曾子立事」も同趣旨。悌悌は氣遣い、憂える貌。曾

子の言行は同書に載る。

7丁裏 「文選ノ王命論二」云々

帝王之祚^そハ、必ズ有リ^ニ明聖顯懿^{けんい}之徳、豐功厚利、積累之業^一。然ル後、精誠通^ジ于神明^一、流澤加^{ハル}于生民^一。故^ニ能^ク爲^ル下鬼神ノ所^ニ福饗スル^一、天下ノ所^ト中歸往スル^上。(班叔皮〔班彪〕「王命論一首」、『文選』卷52論二) 祚は位。福饗は受納。班彪は『漢書』の編者班固の父。

7丁裏 「蔡琰力胡笳二」云々

無^ニ日^トシテ無夜トシテ^一兮不^ルレ思^ハ我ガ郷土ヲ^一、稟氣含^{ミテ}生ヲ兮莫^シレ過^グル^一我ガ最苦^一。(略)(蔡琰『胡笳十八拍』其四) 蔡琰は字文姬(昭姫)。「独断」の著者蔡邕の娘。「胡笳十八拍」は匈奴に囚われた数奇な運命を歌った長詩で、蔡琰の作とも後人の仮託ともいう。稟氣含生は天地の氣を享けて生を得たものの意か。夜氣の意といわれるが、どうか。

8丁裏 「可^ニ以^レ人ヲ而不^ル」如^レ鳥ニタモ乎^一

詩三云ク、邦畿千里、惟^レ民ノ所^ト止^{マル}。詩三云ク、緡蠻^{ゆんぱん}タル黄鳥、止^マルト^ニ丘隅^一。子曰ク、於^テ止^{マル}ニ知^ル其ノ所^ヲ止^{マル}。可^ケン^ニ以^テシテ人ヲ而不^ルレ如^カレ鳥ニ乎^ト。(『大学』) 「邦畿千里」以下『詩経』商頌「玄鳥」、
「緡蠻タル黄鳥」以下『詩経』小雅「緡蠻」。「邦畿」は王城の周辺。
「緡蠻」は黄鳥(コウライウグイス)の鳴き声。「可以」は「足」に近い意か。

8丁裏 「濟タル多士文王以寧シヲ四子講徳二」云々

濟タル多士文王以寧シ。(詩経・大雅「文王」) 「以て・以に」等と訓む

か。「それでこそ(まさに)」という意で文意は通じるようである。「優^{えん}ニ息^{そく}匍^ほ匍^{ふく}シ乎詩書之門^ニ、遊^ニ觀^シ乎道德之域^ニ、咸^{みな}絜^レクシ身ヲ修メ思ヒマ、吐^イテ情素ヲ^一而披^キニ心腹ヲ^一、各^つ悉^{シテ}ニ精銳ヲ^一、以^テ貢^リニ忠誠ヲ^一、允^{まこと}ニ願^フ下推^シニ主上ヲ^一弘^{メテ}ニ風俗ヲ^一、而聘^ハセンコトヲ^中太平ヲ^上。濟^{せい}濟タル乎多士、文王ノ所^ト以^{ナリ}寧スル^一也。」(前漢・王子淵〔王褒〕「四子講徳論 一首 并序」、『文選』卷51 論二) 偃息は憩う。匍匐ははらばう意で、遊觀とも対をなさないので衍字かという。濟濟は優れた人材が多数揃って盛んな貌。「所以」を所以^{ゆゑに}(^{まさに})等と訓めば、本書の趣意に近づく。

9丁表 「法華經ノ科註ニモ為ノ諸義ヲ分釋セリ」

法華經科註とは法華經の科を掲げ、註を施したものという。守倫〔宋〕・徐行善〔元〕・法濟〔明〕・一如〔明〕のものが現存する。「中華電子佛典教會」サイトに『科註妙法蓮華經』の全文電子データが載っている。
(http://www.cbeta.org/result/normal/X31/0607_001.htm)
前田慧雲編『大日本統蔵經』巻二二七〜二四三(蔵經書院 一九一二)。
西義雄・玉城康四郎監修『新纂大日本統蔵經』第31巻(国書刊行会 一九八〇)。爲の諸義の詳細は未確認。

9丁裏 「温太真與^ニ揚州淮中ノ估客樗蒲ス與^ニ輒不^レ競^世」

温太真(温嶠)位未^ダレ高^{カラ}時、屢^{しばしば}與^ニ揚州淮中ノ估客樗蒲シ、與

輒^{すなは}チ不^レ競^ハ。嘗^テ一過シテ大^ニ輸シ物ヲ、戲^{ぎくつ}屈シテ無^レシ。因^{よし}得^{ルニ}反^{ルコトヲ}。
與^と二庾亮^{ゆりやう}一善シ。於^テ二舫中^{はう}一、大^{おほい}喚^{ビテ}亮ヲ曰ク、卿可^{けいべ}レ贖^{あがな}フ我ヲ。庾
即^{即チ}送^ル直^{あたひ}ヲ。然^{シテ}後得^{タリ}還^{ルヲ}。經^{ルコト}此^ヲ數回ナリ。『世説新語』任
誕・第26話） ※引用文は『世説新語補』（劉義慶〔宋〕撰・李贄〔卓吾〕批
点）による。以下同じ。同書では卷一六所載。後の引用文について、本文における世説の
卷数指定は『世説新語補』と一致する。ただし、依拠本は未詳。温
太真は東晋の將軍。估客は商人。樗蒲は博奕。一過は一回の意という。輸
物は負ける。戲屈は勝負に行き詰まり、缶詰にされた状態に甘んじるこ
とらしい。可購とは受け出してほしいという意。本文にいう「かゝりあふ辭」
とは「温のためには」の意か。

9 丁裏 「臨濟云與^ニ我過^シ禪板^ヲ」二云々

舉^こス龍牙問^リ二翠微^ニ、如何^{いか}ナルカ是^レ祖師西來ノ意。微云ク、與^たニ我^ガ過^スニ
禪板^ヲ一來^レ。牙過^{シテ}二禪板^ヲ一、與^フニ翠微^ニ。微接^{せふとく}得^{シテ}、便^レ打^ツ。牙云ク、
打^{ツコト}ハ即^{即チ}任^ス打^{ツミ}、要^{スルニ}且^レ無^{シト}二祖師西來ノ意。牙又問^フニ臨濟^ニ、
如何^{ナルカ}是^レ祖師西來ノ意。濟云ク、與^ニ我^ガ過^シ二蒲團^ヲ一來^レ。牙取^{ツテ}ニ
蒲團^ヲ一過^クニ與^ニ臨濟^ニ。濟接^{せふとく}得^{シテ}、便^レ打^ツ。牙云ク、打^{ツコト}ハ即^{即チ}任^ス打^{ツミ}、
要^{スルニ}且^レ無^{シト}二祖師西來ノ意。『碧巖錄』第20則「龍牙西來無意」 龍
牙は湖南の龍牙山の居遁禪師、翠微は京兆終南山の無學禪師。「拳す」
は提起する意か。「禪板と云ふのは、坐禪をして居る時に疲を慰するため
に、一寸と倚^よりかゝる所の板である。」（釈宗演『碧巖錄講話』 光融館 一

九一七）「接得」は受け取る意。『無門関』（第三七則「庭前、栢樹」）に「趙州
因^{いかなる}僧問^フ、如何^{いか}是^レ祖師西來ノ意。州云、庭前ノ栢樹子。」とある。栢樹
は栢樹。『過す』を「わたす（過渡の意）」と読めば、文意は明白となる。

「本録」は『景德伝燈録』を指すか。「僧問^フ、如何^{ナルカ}是^レ西來ノ意。師
便^{すなは}チ打^ツ。乃^{すなは}チ云^フ、我^レ若^モ不^レ打^タ汝^ヲ、諸方笑^{ハシ}我^ヲ也。」（卷六）

10 丁表 「通雅二以物予^{ルヲ}人三曰^レ過^ト」

『通雅』（明・方以智、首卷3巻・全52巻）は分類別の辞書。「漢典」
(<http://www.zdic.net>)の「詳細解釈」には「給予^{てい}、遞給 [give]」（原
文簡体字）の訳語の後に例文を二つ挙げている。「儒者は」傳^ヘニ先師之業
ヲ、習^{ヒテ}ニ口説^{こうせつ}ヲ一以^テ教^フ。無^シ下^{ケル}智中之造思^に、定^{ムル}ニ然否^ヲ一之論^上。郵人
「文書を伝達する役人・伝令」之過^{わた}シ書^ヲ、門者^{もんしや}「守衛」之傳^{フル}ル教^ヲ也、
封^ト定^{シテ}書^ヲ一不^レ遺^サ、教^審ニシテ令^{ミタリ}不^ルレ遺^サ誤^リ者^ハ、則^チ爲^ス善^{シト}
矣。傳^{（儒）}者^ハ傳^ヘレ學^ヲ、不^レ妄^{ミタリ}ニ一言^ヲ、先師ノ古語、到^{ルマデ}今^ニ具^ツサニ
存^シ、雖^モ三帶^{フルコト}レ徒^ヲ百人以上、位^{スト}博士・文學^ニ、郵人・門者之類
也。』（『論衡』定賢） 「造思」は創見（思いを造^{いた}すこと）。山田勝美『論
衡』下（明治書院 一九八四）には「過書」を過所の意とし、通行手形と
訳す。「予^モ亦謂^フニ之^ヲ過^{スト}」。辰州ノ人謂^フ以^テ物^ヲ予^{フルヲ}一レ人^ニ曰^フレ過^ト
ト。（通雅） 諸橋大漢和辞典には、「とる、一説に、服する。又、敗れる。」
の訳を挙げ、『呂覽（呂氏春秋）』（論威）から「治亂・安危・過勝之所^レ

在^ル也。」を引用する。その注に「過^ハ猶^ホ取^ルガ也。」とあり、また「張本、取^ル作^ル服^{スル}ニ。陶鴻慶云ク、取^ルハ乃チ敗^ル之誤^リナリト。」（集釋）を引く。『呂氏春秋』の原文は「義^{ナル}也者^ハ萬事之起（紀とも）也。君臣・上下・親疎之所^ニ由^リ起^ル也、治亂・安危・過勝之所^レ在^ル也。過^ニ勝スルハ之^ニ、勿^ナク求^{ムル}ニ於^ニ他^ニ、必^ズ反^ルニ於^ニ己^ニ。」（仲秋紀「論威」）であり、取は敗の誤字とも見える。説文解字には「過^ハ度^ル也。」とある。

10 丁表 「宮人手裡^{ヨリ}過^スニ茶湯^ヲ」ト云古句アリ

「延^キ英^ヲ引^ク對^ニ碧衣郎、江硯宣毫各^ニ別床^ニアリ。天子下^{シテ}簾^ヲ親^ミラ考試^ス、宮人手裡^{ヨリ}過^スニ茶湯^ヲ。」（王建「宮詞」）一首は科挙の考試（殿試）の様子を歌う。碧衣郎は宮人か。江硯は硯とも。青州産の紅絲石で作った硯という（「宋」姚寬『西溪叢語』）。宣毫は画仙紙の原型「宣紙」を産した宣城（安徽省）で作られた毛筆。注に「此ノ詩亦云フ微之ノ作^ト。」という。微之は元稹を指す。

10 丁裏 「洞霞飄^スニ素練^ヲ」

「曾^{カフ}テ入^ル桃源ノ路、桃源信^ニ少^{ナリ}雙^ヒ。洞霞飄^シニ素練^ヲ、壁薛画^クニ陰窓^ニ。」古木疑^フ撐^フカト月ヲ、危峯欲^ス墮^チ江^ニ。自^ラ吟^{ジテ}空^{シク}向^フ寂^{タル}ミ誰^ト与^ニ倒^ニ。ニセンニ秋缸^ヲ。」（李賀「得日觀ノ東房^デ」）洞は奥邃^{ふか}い意。霞は残照。素練は白い練り絹製の窓簾。薛は苔。陰窓は北側の窓。僧房の内部か。撐は支える意。危峯は高く切り立った山崖。

缸は酒甕。

11 丁裏 「六書故ニ凡文各^ニ有^レ義以^レ彼ヲ喻^スレ此終ニ不^ニ親切^{ナラ}」云々

『六書故』（卷八）「倚」の反切を示した後に、次のように記す。「説文曰ク、依ハ倚也、倚ハ依也ト。按ズルニ、偏・頗、依・倚ハ聲・義各^ニ相近クシテ、而微^シレ不^ルハ同ジカラ。頗^ハ甚^{シク}ニ於^ニ偏^{ヨリ}モ、倚^ハ力^{アリ}ニ於依^{ヨリ}モ。察^{シテ}ニ其聲之輕重・廣狹^ヲ、而義可^キ知^ル也。凡ソ文ハ各^ニ有^レ義。以^テ彼ヲ喻^フレ此^ニ、終ニ不^ニ親切^{ナラ}。説文ニ依・倚^ヲ互^ニ相釋^ス、此ノ類甚^ダ多シ。盖^シ無^ケレバ所^レ取^ル之^ニ、姑^ク取^ルニ諸^ヲ近似^ニ而已^ニ矣。依・倚、俯・仰之類、人ノ所^ニ同^{ジク}曉^ル、不^{シテ}待^タニ訓故^ヲ而可^キ知^ル也。」親切は深切、實際に即する意。

11 丁裏 「詩語解ノ題引ニ六法ヲアゲ」

字^ニ有^リニ六書^一、各^ニ發^スニ其ノ義^ヲ。茲^ニ不^ニ復^タ舉^ゲ。今^且就^ニ語辭^ニ論^ス之^ヲ。凡ソ初學ノ者欲^{セバ}審^{カニ}セント二字義^ヲ、一^ニ要^スス原^{モト}。二字音^ニ。即チ如^キニ上^ニ所^ニ云^フ、是^レ也。二^ニ要^スス審^{カニ}セント二字形^ヲ。如^キニ忽[・]欬[・]謾[・]漫之類^ノ、義通^{ジテ}各^ニ有^ルハ所^レ从^マ是^レ也。三^ニ要^スス推^{サシ}コトヲニ本義^ヲ。如^キ下都^ハ以^ニ國都^ノ之一治^{ナル}言^ヒ、總^ハ以^ニ束^{ネテ}絲^ヲ而一緼^{ナル}言^ヒ、渾^ハ以^ニ水之渾^テ不^ルレ分^{カレ}言^フ上^ニ、是^レ也。四^ニ要^スス思^ハントヲニ反對^ヲ。如^キニ此^ハ彼之反[、]是非之反^ノ、是^レ也。又如^キニ始^ハ與^レ終對^{シ、}初^ハ與^レ後對^{シ、}義各^ニ可^シレ見^ル。五^ニ要^スス及^ハハントヲニ本音^一。

復^{扶候}有^レリ^切二反復・重復^{方六}、更^{居孟}有^レリ^切二更^{古衡}改之^レ意、任^{如禁}有^レル^切二保任^{如深}之意、是^レ也。六^三要ス下^二以テ^一古語^三所^レ用^レヒタル^二比^一校シ之^レヲ、照^中定^レセン^二コトヲ^一之^上。或^{イハ}同義^ニシテ而^レ異例、或^{イハ}異訓^ニシテ而^レ同用、或^{イハ}連用^ニシテ而^レ勢變ジ、或^{イハ}訛傳^ニシテ而^レ循用ス。加^{コル}ニ之^ニ随ツテ^二世代^ニ移換スル者モ亦多シ。此^レ皆字書・韻書^ニ所^レ不^レ能^レ纖悉セ^一、今^レ為^メニ初學ノ^一示ス^二隅反之例^一ヲ已^{のみ}。〔《詩語解》題引〕○○之切は反切の指示。「加之」は大

典の読み。隅反は「子曰ク、不^レバ^レ憤セ^レ不^レ啓セ^レ、不^レバ^レ悱セ^レ不^レ發セ^レ。舉^ゲテ

二一隅ヲ^一不^レバ^レ下^二以テ^一三隅ヲ^一反セ、則チ不^レ復セ也。」〔《論語》述而〕

12 丁表 不^二亦惠^{スレトモ}而^{不^二費^フ}乎

子張問^{ヒテ}ニ於^二孔子^一ニ曰ク、何如^{モバ}斯^ニ可^ニキカ^ニ以テ從^フ一^レ政^ニ矣。子曰ク、尊^ビニ五美ヲ^一、屏^{ケバ}ニ四惡ヲ^一、斯^ニ可^ニシ^ニ以テ從^フ一^レ政^ニ。子張曰ク、何ヲカ謂フ^二五美ト^一。子曰ク、君子ハ惠^ニシテ而^レ不^レ費^{ヤサ}、勞^{シテ}而^レ不^レ怨^ミ、欲^{シテ}而^レ不^レ貪^ラ、泰^{シテ}而^レ不^レ驕^ラ、威^ニシテ而^レ不^レ猛^{ナラ}。子張曰ク、何ヲカ謂フ^二惠^ニシテ而^レ不^レ費^{ヤサ}。子曰ク、因^{リテ}ニ民之所^ニ利^{スル}而^レ利^{スレ}之^ヲ。斯^ニ不^二亦惠^ニシテ而^レ不^ルニアラ^一費^{ヤサ}乎。〔以下略〕〔《論語》堯曰〕「屏」は屏除・屏棄。

13 丁表 「綱目集覽」將無猶^下言^二無乃得無ト^一之類ノ上意以^二為是ト^一而未^二敢テ自主^{タラ}一也ト釋セリ」

阮宣子（阮修）有^二令聞^一。太尉王夷甫（王衍）見^{マミ}而問^{ヒテ}曰ク、老・莊^ト與^ハ二聖教^一同^ジキカ異ナルカ。對^{ヘテ}曰ク、將^ニ無同^ジキニ^一。（宋）朱熹集覽、

〔元〕王幼學撰『資治通鑑綱目集覽』 『世説新語箋疏』に以下のよう

あるという。「黃生義府下ニ云ク、將^ニ無トハ^一者、然リ而ウシテ未^ダ二遽然^一タル^一之辭ナリ。謝太傅（謝安）云ク、『將^ニ無歸ルコト^一』（後出）。晉人ノ語度ノ舒緩ナル、類^ネ如^シレ此ク。後人妄^リニ意^ヒ生^ヒニ解^ス。總^テ由^ホシレ不^ルガ^レ悉クサ。當時ノ口語ナル耳。嘉錫案ズルニ、此^レ與^二演繁露之說^一合^ス。」義府は書名。

未遽然は遽かに判断することを控える意。「演繁露續集卷五ニ云ク『不^{シテ}直^チニ云ハ^一同^ジト而^{云フハ}三將^ニ母ト同^ジキコト^一者、晉人ノ語度自^ラ爾^ル也。庾亮辟^{シテ}ニ孟嘉ヲ^一為^ニ從事ト^一。正旦ノ大會ニ、褚裒問^フ嘉何^クニ在^ルト。亮曰ク、『但^タ自^ラ覓^メ之^ヲ。』裒歷觀^シ指^{シテ}嘉ヲ曰ク、『將^ニ母是^{ナル}一乎。』將^母者ハ、猶^ホキレ言^{フガ}ニ殆^ド是^レ此ノ人ナリト^一也。意^ニ以^ニ為^ヘドモナリト^一而未^ダル^ニ敢^テ今^レ自^ラ主^ヘ也。其ノ指^{シテ}孔ヲ、老ヲ為^スモ同^ジト、亦此ノ義也。』

「王若虛ノ滹南遺老集ニ亦曰ク、『瞻^ルニ意^ヲ蓋^シ言^同ジキ耳。將^無ト云フハ者、猶^ホ無乃、得無之類ナリ。荀晞從^母子求^ムレ為^{ラン}コトヲ^レ將^ト、晞拒^{ミテ}之^ヲ曰ク、『吾不^下以^ニ王法ヲ^一貸^サ上^レ人^ニ、將^ニ無後悔^{スル}コト^一耶。』』この話は『晋書』に見える。「劉裕受禪。徐廣攀^{ジテ}二晉帝ノ車^一泣涕^ス。謝晦謂^{ヒテ}之^ニ曰ク、『徐公得^ニ無小過^一。』皆是ノ類也。』

「嘉錫案ズルニ、雅量篇ニ『謝太傅汎^{ビテ}海^ニ戲^ル。風急浪猛ナリ。公徐^ニ云ク、『如^シレ此ク。』將^ニ母歸^ルコト^一。』任誕篇ニ『謝安（始^メテ出^デ西（建康）ニ戲^ル（博奕）シテ失^ヒ二車・牛ヲ^一、便^チ杖策^{シテ}步^ミ歸^ル。道^ニ逢^ヒ二劉尹

〔劉惔〕ニ曰ク、『安石〔謝安〕將ニ無傷ヲト。〔謝乃チ同ニ載リテ而歸ル。〕』

並ニ可シ與レ此互ニ證トス。蓋シ將母ハ者、自ラ以ニ為ヘドモ如シト。此ク、而不
レ欲セ直ニ言スルヲ之ヲ、委ニ婉ニシテ其ノ辭ヲ、與レ人商榷スル之語也。傷
ハ負ける、商榷は物事の善し悪しを計る意。王若虚曰ク、『蓋シ欲ス

三直ニ言セント其ノ同ジキヲ、而不ルニ必ズシモ疑ハ也。』方以智ノ通雅卷五
曰ク、『將母、得亡、母乃ノ稱、皆發問之聲也。』韓詩外傳ミ『客見ユ

周公ニ。周公曰ク、『何ヲ以テ道フ旦。』曰ク、『入ル乎將母。』曰ク、『請
フ入ラン。』曰ク、『坐ス乎將母。』曰ク、『請フ坐セン。』曰ク、『疾ク言ハバ則翕翕
タリ、徐ロ言ハバ則チ不レ聞。言フ乎將母。』翕翕はせかせかと慌てる意。

「方言〔楊雄〕ニ『無寫ハ、謂フ三相見テ驩喜シ、有ルヲ得亡之意也。』」莊
子〔德充
府篇〕ミ子産曰ク『子母ニ乃稱スルコト。』左氏用キルニ以テシ
轉語ヲ、莊・韓ハ用キルニ以テス結句ヲ。古人善ク摹スル二人之聲音・神狀ヲ

一如シレ此ク。阮千里〔阮瞻〕曰ク、『將ニ母同ジキコト。』本ト謂フ下得
母キヲニ乃チ同ジキコト一乎ト。猶ホシレ言フガニ能ク母キ同ジキコト也ト。葉夢得
為シテニ之ガ解ヲ一曰ク、『本ト自ラ無クシバ同ジキト、何ニ因リテカ有ラン異ナルコト。』

此レハ是レ東坡ノ所謂『設ケテ械ヲ〔以テ應ジレ敵〕匿シレ形ヲ〔以テ備フレ敗ル〕、
〔窘マレバ則チ推シテ墮ツル〕混漾〔河海〕ニ。』之伎倆耳。東坡の引用
文はもと僧侶に対する批判の語。〔蘇軾文集〕卷12「中和勝相院記」

13 丁表 「天其以レ礼悔マハ禍スルヲ于レ許無ニ寧茲ノ許公復奉スルニ

其社稷ヲ 左傳隱十一年正義ニ無寧ハタ也ト注スレ
ト母乃ト同義ナリ左傳處々此語アリ

若シ寡人得レ没スルコトヲニ于地ニ、天其以テ禮ヲ悔イバ禍セシヲニ于許ニ、
無寧茲ノ許公復奉ズルノミナランヤニ其ノ社稷ヲ。〔略〕寡人之使ムルハニ吾子ヲ
シテ處ラレレ此ニ不ニ唯ダ許國之爲ノミナラ、亦聊カ以テ固クセントニ吾ガ圍ヲ也。

圍は辺陲・国境。許の莊公を追放し弟に許國を襲がせた鄭伯の言葉。

13 丁表 「居テ簡ニ而行レ簡ヲ母ニ乃大簡ナルニ乎 論
仲弓〔冉雍〕問フニ子桑伯子ヲ。子曰ク、可也、簡ナレバナリ。仲弓曰ク、居テ

敬ニ而行ヒ簡ヲ以テ臨マニ其ノ民ニ、不ニ亦可ナラ一乎。居テ簡ニ而行フハ
簡ヲ無カラシカニ乃チ大簡ナル一乎。子曰ク、雍之言然リ。〔論語〕雍也 冉仲
弓が魯人子桑伯子の人物についてあまり大まかではあるまいかと懸念し

た話。〔母乃〔無乃〕〕を二字連用として解すべきことを大典は説く。

13 丁裏 「亡ニ其言レ臣ヲ者將タ賤シテ而不トスルニ足レ聽ニ耶 秦策注ミ亡其
語之至レル者ハ、臣不ニ敢テ載セニ之ヲ於書ニ。其ノ淺キ者ハ、又不レ足ラレ聽クニ

也。意フニ者臣愚ニシテ而不ルカ闔ニ於王ノ心ニ耶。亡其言フレ臣ヲ者、將ニルカ
ニ賤シクシテ而不ト一レ足ラレ聽クニ耶。〔戰國策〕秦下・昭襄王下「范子因王稽入秦」
臣は范雎。「語之至者」は機密の話。注に「亡其」は「亡乃」に同じ

とする。横田惟孝〔乾山〕『戰國策正解』に「むしろ」と傍訓を施す。

13 丁裏 「籍スニ人ニ以スレ此ヲ得ンレ無レ危一乎 同

應侯謂ヒテ昭王ニ曰ク、亦聞ケル恒思ニ有ニ神叢一與。恒思ニ有ニ悍少

年^一。請^{ウテ}與^レ叢^{ハク}博^{スル}。曰ク、吾勝^タ叢^ニ。叢^ニ籍^{スコト}。我^ニ神^ヲ。三日ナレ、不^レ勝^タ叢^ニ。叢^ニ困^ム我^ヲ。乃チ左手^{モテ}爲^メ叢^ノ投^シ、右手^{モテ}自^ラ爲^ス投^ヲ。勝^ツ叢^ニ。叢^ニ籍^{スコト}。其^ノ神^ヲ。三日、叢^ニ往^キ求^ム之^ヲ。遂^ニ弗^レ歸^サ。五日^ニシテ而^{シテ}叢^ニ枯^レ、七日^ニシテ而^{シテ}叢^ニ亡^ビス。今國^ハ者、王^ノ之叢^{ナリ}、勢^ハ者王^ノ之神^{ナリ}。籍^ス人^ニ以^テセバ、此^ヲ得^ンヤ無^キラ危^キコト乎[。]（同前）應侯^ハ范^ハ睢[。]恒思^ハ地名。神叢^ハ神祠^ノ叢^ノ樹。叢^ト博奕^ヲを打^ツといふ不思議なたとえ話。神は神通力。悍悪な少年は有利な右手で賽を投^ゲて勝利した。

13 丁裏 「此ノ君小異^{ナリ}得^{アラ}無^{スヤ}是^{ナルニ}一^ハ乎[。]世説

↓注記前出

武昌ノ孟嘉^ナ作^リ庾大尉^ガ州ノ從事^ト、已^ニ知^{ラル}名^ヲ。褚太傅^{チヨ}有^リ知^ル人^カ。罷^{メテ}豫章^{ヨシヤウ}還^リ、過^ギ武昌^ニ。問^テ庾^ニ曰ク、聞^ク孟從事^ガ佳^{ナル}。今在^リ此^ニ不^ヤ。庾云ク、卿自^ラ求^メ之^ヲ。褚眄^{ベン}睐^{ライ}良久^{シク}シテ、指^シテ嘉^ヲ曰ク、此ノ君小^{シク}異^{ナリ}。得^ル無^キコト^ラ是^{ナル}乎[。]庾大^ニ笑^{ヒテ}曰ク、然^リ。于^ニ時^ニ既^ニ歎^ジ褚之默識^ヲ、又欣^ニ嘉^ス之^ガ見^ル、一^レ賞^セ。『世説新語』7 識鑒篇第16話、新語補卷8）大尉・太傅は三公の一。大尉は軍事を掌る。州は荊州。従事は州の刺史の属僚のうち、局長・部長クラスの汎称。褚太傅は褚裒。豫章は豫章の太守（長官）だったこと。眄睐は顧眄。

13 丁裏 「拍^{シテ}孟嘉^ヲ曰ク、將^ニ無^{スヤ}是^{ナルニ}一^ハ乎[。]同

同前話注に「嘉別傳^ニ曰ク、」として「裒歴觀^久ウシテ之^ヲ指^{シテ}嘉^ヲ曰ク、將^ニ無^{スヤ}是^{ナルニ}一^ハ乎[。]とある。別伝は『晋書』（卷98）桓温傳附孟嘉傳か。

13 丁裏 「如^ハ此^レ將^{ナカラ}無^{シヤ}歸^一。同

↓注記前出

謝太傅（謝安）盤^{バン}桓^{クワン}東山^ニ。時^ニ與^ニ孫興公（孫綽）諸人^一汎^テ海^ニ戲^ル。風起^リ浪涌^ク。孫・王（王羲之）諸人^色並^ニ遽^テ、便^チ唱^テ使^ム還^ル。太傅神情^方王^ニ吟嘯^{シテ}不^レ言^ハ。舟人以^テ公貌閑^ニ意説^フ、猶^ホ去^テ不^レ止^マ。既^ニシテ風轉^急浪猛^シ。諸人皆誼動^{シテ}不^レ坐^セ。公徐^ニ云ク、如^キハ此^ノ將^ハ無^{シヤ}歸^ルコト。衆人即^チ承^テ響^ヲ而回^ル。於^テ是^ニ審^ニ其^ノ量^ノ足^ルヲ以^テ鎮^ニ安^{スル}朝野^ヲ。『世説新語』6雅量篇第28話、『補卷8）盤桓はふらふら歩き回る様。東山は会稽。王は王（盛ん）の意。「將無歸。」は「そろそろ帰ろうではないか。」の意。量は度量。

13 丁裏 「觀^{レバ}君^カ所^ヲ言^ハ、將^ニ不^ヤ早^ニ慧^{ナリ}シニ一^ハ乎[。]融傳

煒（陳煒）曰ク、夫^ノ人小^ニシテ而^{シテ}聰^リ了^{タリ}。大^ニシテハ未^ダ必^ズシモ奇^{ナリ}。融（孔融）應^{ジテ}聲^ニ曰ク、觀^{レバ}君^ノ所^ヲ言^ハ、將^ニ不^ヤ早^ニ惠^{ナリ}シニ一^ハ乎[。]膺（李膺）大^ニ笑^{ヒテ}曰ク、高明必^ズ爲^{ラン}偉器^一。『後漢書』卷60「鄭太・孔融・荀彧伝」孔融は孔子二十四代の裔孫という。名士李膺に面会するために膺が老子（李耳）と同じ李姓なので縁があるといつて機智を働かせた。また、陳煒の批判に対してすかさず逆手を取った。高明は立派な人という意味で相手に対する尊称。『世説新語』（言語）にこの話を採る。

13 丁裏 「得^ン無^{シヤ}諸君^ニ是^ニ其^ノ苗裔^{ナル}一^ハ乎[。]世説

蔡洪赴^ク洛[。]洛中ノ人問^{ウテ}曰ク、幕府初^{メテ}開^キ、羣公辟^メ命^{アリ}。求^メ英奇

ヲ於^{そくろう}仄陋^ニ、采^ル賢儔^ヲ於^ニ巖穴^ニ。君^ハ吳楚^ノ之^ニ士、亡國^ノ之餘^{ナリ}。有^リテ何^ノ異才^ニ而應^ズト^ス斯^ノ舉^ニ。蔡答^ハ曰^ク、夜光^ノ之^ニ珠、不^ニ必^ズ出^デ於^ニ孟津^ノ之^ニ河^{ヨリ}。盈握^ノ之^ニ璧、不^ニ必^ズ采^ラ於^ニ崑崙^ノ之^ニ山^ニ。大禹^ハ生^レ於^ニ東夷^ニ、文王^ハ生^ル於^ニ西羌^ニ。賢聖^ノ所^レ出^{ツル}、何^ソ必^ズ常處^{アラン}。昔武王^ハ伐^チ紂^ヲ遷^ス頑民^ヲ於^ニ洛邑^ニ。得^{シヤ}無^{キヤ}諸君^ハ是^レ其^ノ苗裔^ナ乎^ト。〔『世説新語』言語22、『補』卷3〕幕府は齊王攸の政府。辟命は召見・任命。仄陋は僻陋の地・片田舎。夜光之珠は隋侯に命を助けられた蛇が報恩のために齎した明月の珠。夜も昼のごとく、隋珠と呼ばれた。盈握は掌一杯の璧。大禹は諸馮（山東省）出身である舜（『孟子』離婁下）の誤りという。武王の話は『尚書』（多士）。またこの対話は華令思〔譚〕と王武子〔濟〕の問答（『晋書』）の穿鑿剽竊であるという。

14 丁表 「不^レ煩^ニ復^ル」^{世説} 一七

羅君章（羅含）曾^テ在^リ人^ノ家^ニ。主人令^シ與^ニ坐^上ノ客^一共^ニ語^ラ上、答^テ曰^ク、相識^已多^シ。不^レ煩^{ハサ}復^タ爾^{（世説新語）}。〔『世説新語』方正篇第56話、『補』卷7〕

14 丁表 「若思^テ不^ハ能^レ得[」]「便^不勞^レ讀[」]書^同 六」

宋の劉義慶原撰という『世説新語』（文学96）に対して明の王世貞が敷衍した補説（『世説新語補』巻6）の注記に『齊書』を引用する。本文は、その注記からの引用と一致するが、後述のように（24 丁表）大典が據つた

書に載る段が李卓吾批点『世説新語補』には見られない。依拠本は別にあるか。「齊書」曰^ク、劭^{（世）}妻^ノ弟^{李節}モ亦才學之士ナリ。謂^フ劭^ニ思^ヒテ誤書^ヲ、何^ニ由^リテカ便^チ得^シ。劭答^ハ曰^ク、若^シ思^ヒ不^レ能^ハ得^ルト、便^チ不^レ勞^セ讀^ムコトヲ書^ヲ。〔『齊書』〕とは『北齊書』を指す（列伝第28 邢邵伝）。李節の言葉は、邢邵の「誤書モ思^ハ之^マ更^ニ是^レ一適ナリ。」の語に對するものである。『世説新語補』原文の訓点は「若^モ思^テ不^カ能^レ得[」]。便^不勞^セ讀[」]書[」]であり、これでは文意が通じない。既成のテキストをその訓読で一新する。そういう箇所を大典は例に挙げる。

14 丁表 「青史無^レ勞^レ數^ニ趙張[」] ^{杜詩} 一

秋日野亭千橘香。玉盤錦席高雲涼。主人送^ル客^ヲ何^ノ所^レ作^ル。行^リ酒^ヲ賦^{シテ}詩^ヲ殊^ニ未^ダ央^{（キ）}。衰老應^ニ為^ス難^{シト}離^別シ、賢聲此^ヲ去^{リテ}モ有^リ輝光^一。預傳籍籍^{タリ}新京尹。青史無^シ勞^{スル}數^{フル}趙張[」]。（杜甫「章梓州橘亭餞^ル成都^ノ賈少尹^ニ（得^ニ涼^ノ字[」]）」、『全唐詩』巻227）章梓州は章彝。趙張は前漢の京兆尹の趙廣漢・張敞。行酒は献酬。

14 丁表 「青春^ニ不^レ假^レ報[」] ^同 二 黄牛[」] 一

汝迎^テ妻^子ヲ達^ス荊州^ニ。消息真^ニ傳^{ハリテ}解^ク我^ガ憂^{ヒラ}。鴻雁影來^ル連峽^ノ内、鵲鵲飛^フ到^ニ沙頭^ニ。曉^{（げう）}關險路^今虛^{シク}遠^ク禹^ノ鑿^{（ほ）}寒江正^ニ穩^{（カ）}流^{（ル）}。朱紱^{（しゆふつ）}即^チ當^ニ隨^フ彩^{（けき）}鷁^{（ニ）}、青春^ニ不^レ假^ラ報^{ズル}コトヲ^ニ黄牛[」]。（下略）（「舍弟觀赴^キ藍田^ニ取^テ妻^子ヲ到^ニ江陵^ニ」喜^{ビテ}寄^ス三^三首[」]

「『宋本杜工部集』卷16、『全唐詩』卷231） 舍弟は異母弟杜觀。妻子

は妻の意。鵲鳩は兄弟に喩えるという。嶢關は藍田県南の難所。朱紱

は天子が大夫に下賜する印綬。杜甫自身を言う。彩鷁は船。黄牛は湖

北西陵峡付近の灘の名。尾聯は来春三峡を穿つて洛陽に向かう意。

14 丁表 「喬木若存セハ可シヤ假花ヲ」同

庾信・羅含俱有宅、春來秋去リテ作誰家ト。短牆若シ在ラバ從ハ

ン殘スニ草ヲ、喬木如シ存セハ可シヤ假花ヲ。ト築應ニ同ニ蔣詡ノ徑、

為園須シ似ス邵平ノ瓜。比年病酒開ニ涓滴ヲ、弟勸メ兄酬ユ何ソ怨ミ

嗟カン。（承前、第三首） 庾信・羅含は共に嘗て江陵に住んだ文人。蔣詡

の徑とは、漢の蔣詡が庭に三つの徑を作り、松・菊・竹を植えた故事から

隱者の庭の意。邵平の瓜とは、秦の東陵公邵平が秦の滅亡後長安城東で

瓜を育てて売り、東陵の瓜と言われた故事。比年は近年。涓滴はひと雫。

14 丁裏 「不キ意永嘉之中復聞ントハ正始之音」世説九注ニ

王敦爲リニ大將軍ト、鎮スニ豫章ニ。衛玠避テ亂ヲ、從リ洛投ズ敦ニ。相

見テ欣然。談話シテ彌ル日ヲ。于レ時謝鯤爲リニ長吏ニ。敦謂テ鯤ニ曰ク、

不リキ意永嘉之中、復聞カントハ正始之音ニ。阿平若シ在ラバ、當ニ復

絶倒ス。（『世説新語』賞譽51、『補』卷9） 「正始之音」とは、魏の正

始年間頃（三世紀半ば）の何晏・王弼らによる清談を指す。阿平は王澄。

王澄は人に屈しない才人だったが、衛玠の言葉にはいつも感歎絶倒した

という。ここでは衛玠と謝鯤の清談を指す。注には「別傳ニ曰ク」とし

て「不キ悟」とする。別伝は『晋書』（卷36・列傳6）衛玠伝。

14 丁裏 「不キ悟更ニ以爲ントハ黨ト不キ寤滄溟未レ運波臣先蕩セントハ」

滂對今日ク、臣聞ク仲尼之言ヲ。見テハ善ヲ如クシ不ルガ及バ、見テハ惡ヲ

如クス探ルガ湯ヲ。探ルトハ湯ヲ喩ルニ去リ疾ミ。欲スレ使メント善トシテ

清キヲ、惡トシテ惡ヲ同モ其ノ汚キヲ上。謂フ王政之所ヲ願フ聞ク。不リ

キ悟更ニ以テ爲サントハ黨ト。甫曰ク、卿ハ更ニ相拔譽シ、送ニ爲リ膺齒ニ。有

レバ不ルレ合ハ者、見ルニ則排斥セ。其意如何。○劉放曰ク、見ルハ按スルニ

乃チ慷慨シ仰イデ天ヲ曰ク、古之循フモハ善ニ自ラ求ムニ多福ヲ。今之循フ

モノハ善ニ身陷ルニ大戮ニ。劉放曰ク、按スルニ文ヲ循。身死スル之日、願クハ埋メヨ

首陽山ニ、見ユ史記ニ。首。甫愍然トシテ爲メニ之ガ改ム容ヲ。乃チ得タリ並ニ解カ

陽山ハ在リ洛陽ノ東北ニ。鄭玄注シテニ周禮ニ曰ク、木ノ在ラ

ルニ桎梏ヲ。足ニ曰ヒ桎ト、在ラレ手ニ曰ヒ梏ト。（『後漢書』卷57「黨錮傳」范滂

の項） 甫は中常侍の王甫。膺齒は密接な利害関係にあること。「不悟」

は「不料」（料らず）の意ともいう。改容は顔付き・態度を改めること。

／不リキ寤滄溟未ダレ運ラ波臣自ラ蕩リ、渤澥方ニ春ニシテ、旅翮先ツ謝

セントハ。（『文選』卷40 謝玄暉「謝朓」「拜セラレニ中軍記室ニ、辭スルニ隋王ニ」賡）

滄溟・渤澥は大海。波臣は海の使者、『莊子』の語。旅翮は鴻雁の羽。

謝朓が隋王に心ならず別れる名残の情を述べた文という。

15 丁裏 「六書故ニ偏頗依倚聲義近シテ而微シ」不_レ同_ラ頗_ハ甚_ク於_リレ
偏倚_ハ力_{アリ}於_リレ依_レ察_{シテ}ニ聲之廣狹輕重_ヲ一義可_レ知也」 ↓11 丁裏

16 丁表 「天地之道高也明也」_中庸

誠_ハ者自_ラ成_ス也。而_{シテ}道_ハ自_ラ道_ク也。誠_ハ者物之終始ナリ、不_レバ誠ナラ
無_シ物。是_ニ故_ニ君子ハ誠ニスル_ヲレ之_ヲ爲_ス貴シト。誠_ハ者非_{ザル}ニ自_ラ成_スノミ_レ
己_ヲ而已_一也、所_ニ以_レ成_ス一_レ物_ヲ也。成_スハ己_ヲ仁也、成_スハ物_ヲ知也、性之
德也。合_{スル}ニ外_ニ内_ニ一_ノ道也。故_ニ時_ニ措_{キテ}レ之_ヲ宜_{シキ}也。右第二十五章ノ
故_ニ至_ニ誠_ハ無_シ息_也。不_レバ息_マ則_チ久_シ。久_シケレバ則_チ徵_{アリ}。徵_{アレバ}則_チ悠遠
ナリ。悠遠ナレバ則_チ博厚ナリ。博厚ナレバ則_チ高明ナリ。博厚_ハ所_ニ以_レ載_{スル}一_レ物
ヲ也、高明_ハ所_ニ以_レ覆_フ一_レ物_ヲ也、悠久_ハ所_ニ以_レ成_ス一_レ物_ヲ也。博厚_ハ配_シ地_ニ、
高明_ハ配_シ天_ニ、悠久_ハ無_シ疆_也。如_キレ此_クノ者_ハ、不_{シテ}見_サ而章_{ハレ}、不_{シテ}
動_カ而變_ジ、無_クシテ爲_ススコト而成_ル。天地之道_ハ、可_ベニ一_ニ言_ニシテ而盡_ス一_也。
其_ノ爲_ル物_不レ貳_{ナラ}、則_チ其_ノ生_{ズル}物_ヲ不_レ測_{ラレ}。天地之道博也、厚也、
高也、明也、悠也、久也。(略) 詩ニ云ク、維_レ天_ノ命、於_レ穆_トシテ不_レ已_マ。蓋_シ
曰_フ三_ノ天之所_ニ以_レ爲_ル一_レ天也。(下略) 右第二十六章 「穆_トシテ」は高遠な貌。_{さま}

16 丁表 「道_ハ則_チ高_ク矣_美矣_孟子」
公孫丑曰_ク道_ハ則_チ高_ク矣_美シ。宜_{シク}ニ若_クレ登_ルガ_レ天_ニ然_ル一_也。似_{タリ}レ
不_ルニ可_{カラ}レ及_フ也。何_ソ不_ルト使_メ下_レ彼_ヲシテ爲_ラ中_ニ可_クシテ幾_ド及_フ一_而曰_ク
孳_孳上_也。『孟子』盡心章句上) 「孳_孳」は「孜孜」に同じ。吉田松陰

『講孟筭記』序の冒頭に、「道_ハ高_ク矣_美矣_約也、近也。人徒_ラニ見_テ
其_ノ高_ク且_カ美_{シキ}ヲ一_、以_テ爲_スレ不_ト可_{カラ}レ及_フ。而_モ不_ル知_ラニ其_ノ約_ニシテ
且_ツ近_ク、甚_ダ可_キコトヲ一_レ親_{シム}也。富貴貧賤、安樂艱難、千百變_{ズル}モ二_乎前_ニ
一_、而_モ我_ヲ待_ツコト_レ之_ヲ如_クレ一_ノ、居_ルコト_レ之_ニ如_シレ忘_レタルガ。豈_ハ非_{ズヤ}二_約ニシテ
且_ニ近_キニ一_乎。」とある。ここでも、「矣」と「也」の区別が見られるか。

16 丁裏 「至_テレ_ニ應_シレ_ニ天_ニ順_レ人_ニ其_ヲ揆_一ナリ焉」_{王命論}

昔_ハ在_リ帝堯之禪_ニ曰_ク、咨_ニ爾_舜、天_ノ之_ニ歷_數ハ在_リト二_爾躬_ニ。舜_モ亦_以テ命_ズレ
禹_ヲ。暨_{シテ}二_稷・契_ニ、咸_ニ佐_ケ二_{唐虞}ヲ一_、光_ニ二_{濟シ四海}ヲ一_、奕_ニテ_レ世_ヲ載_ツ
ミ德_ヲ、至_{リテ}二_{于湯武}ニ一_、而_有テ_リ二_{天下}ヲ一_{。雖_モ其_ノ遭_遇ハ異_ニシ_レ時_ヲ、禪}
代_不ト一_レ同_ジカラ、至_{リテ}ハ二_{于應_シレ_ニ天_ニ順_フニ}人_ニ其_ヲ揆_ハ一_{ナリ焉}。(班彪
『王命論』) 歷_數は天道。稷・契は堯に仕えた名臣。稷は武の祖、契は湯
の祖となる。唐虞は帝堯。禪代は禪讓と放伐。なお、『孟子』(離婁下)に
同趣旨の言葉がある。

17 丁裏 「徂_ル來_ノ學_則ニ吾_備公_ノ和_訓ヲ作_リシヲイヘリ」

有_テ二_{黃備氏}トイフ者出_ルコト、西_ノカタ學_ニ於_ニ中國_ニ、作_ニ爲_{シテ}和_訓ヲ一_以教_フ
ユ_ニ國人_ニ、亦_猶易_ニ乳_ニ以_シレ穀_ヲ虎_ハ遇_チ於_ニ菟_ノ顛_ニ倒_シ其_ノ讀_ヲ、錯_ヘ
テ而綜_テ之_ヲ、以_通ズ二_{二邦之志}ヲ一<sub>。於_レ是_ニ乎_ニ吾_謂フ_ニ之_ヲ侏_離鳩_舌ト一_{者、}
吾_際ル_{コト}猶_レ吾_ガ。是_則詩書禮樂之爲_ルレ教_也、庶_{クハ}足_ンカ_ニ以_レ被_{シム}
ル_ニ諸_ヲ海_表ニ邪。黃備氏_ガ之_有ル_功ニ德_{東方}一_{、民}至_{マデ}レ_今三_賴レ_之ニ。</sub>

（『徂徠先生學則』學則一） 吉備氏は原文「黃備氏」。錯綜は互いに組み合わせる事。「侏離缺舌」は原文「侏^リ鳩^コ舌」に作る。海表は海外。吉備真備は孫子の兵法にも通じていたところから兵法好きの荻生徂徠が関心を寄せていたのではないか。カタカナの発明者に擬せられているが大典の指摘の通り、俗説であるといわれる。

18 丁表 「近來宇士新和訓ヲ改テ縁譯ト名ケル經書ニ附ラレキ」

「縁譯」の語を載せた典拠未詳。ただし、『文語解』や『詩語解』の例言に宇士新（宇野明霞）の訳法の獨創性について言及がある。「請に須の義あり、好に宜の義あり、使に若の義あり。皆本義より轉ず。庶幾にちかし、儻にもしくは義あるよりしてねがふ辭となる。今の字いまと云よりして發端の辭となり、又轉じてもしの義となる。今有璞^レ玉於^レ此の類はもしいまの義となれども、今有^二少卒暴^三起^一の類（↓後出 19 表）はもしの義のみにしていまの意はなし。凡字義の展轉する^レ多くこの類にして字書訓詁のつくす所に非ず。學者舊來の倭讀に泥て義意にくらき^レ多し。士新の譯法あに千古の發明ならずや。」（『文語解』凡例）

19 丁表 「嘗ハ過^キ去^リシ^一ヲイフ義ナレハ^一セシ^一アリト云義ニ^二アタル^一ヲカツテ讀ノ詛^ル 文語解ニ委ク辨ス」

嘗^{かつて} 通じて作^レ常^ニ。この字元來なむると云義なり。なむるは我口を経たる^レなり。其より轉じて凡そ耳目身心に經たる^レをいふ辭となる。

古來かつてと譯すれども本義に非ず。この字會と同訓なり。然に會の字に會不會無と用る一義あり。此かつての譯にあたる。因て誤て會嘗ともに右の經るの義を混じすべてかつてと譯したるものなり。會にはかつてと經る義との二訓あり。嘗の字は經る義のみなり。然るに六朝に至て嘗不嘗無の語あり。これ會嘗同訓（同音カ）ある故に會不會無の義までを混じて嘗不嘗無と用るなり。古文の法には無^レなり。中華すら時代によりて訓詁を謬^{あやま}り来れば、倭譯の訛轉はことほりなり。古代の書をみればこの字むかしと譯せり。此かつてといふより好れども文によりてむかしと云程になき所あり。凡そ既往の事を話にかうくしたる^レありしといふ。この字ありしと云辭にあたる。吾嘗^{ありし}終日不^レ食終夜不^レ寐以思^一。これ既往一時の^レをいへば、ありしにてよく通ずれども、既往平生の^レをいふ辭にも嘗を用れば、ありしの譯文あたらず。呂尚盖嘗窮困^シ年老^{タリ}矣^{齊世}。吾騎^二此ノ馬^一五歲、所^レ當無敵嘗一日^三行^一千里^{項羽}。これ平生をいふ辭なり。畢竟この字に的當する倭語なし。世上に皆かつてと讀て經る義を解し来れば其にまかすべし。會嘗に二訓あれば倭語のかつてにも二義ありと謂て了すべし。（略）（『文語解』卷一） ※原文漢字 カナ交り文。

19 丁表 「今有^二少卒暴^三起^一ル^一子^一」

武侯問^{ヒテ}曰ク、若シ敵衆ク我寡^{すくな}キトキハ、爲^ススコト^レ之^ヲ奈何^{いかに}。起對^テ曰ク、避^ケ之^ヲ於^レ易^いニ、邀^{むか}之^ヲ於^レ阨^いニ。故^ニ曰ク、以^テ一^ヲ擊^ツハ^レ十^ヲ、莫^なク^レ善^キハ^二

於阨^{ヨリ}、以^レテ十^ヲ擊^ツハ百^ヲ、莫^ク善^キハ於^ニ險^{ヨリ}、以^レテ千^ヲ擊^ツハ萬^ヲ、莫^シト善^キハ於^ニ阻^{ヨリ}。今有^リ二少卒^一、卒^ニ起^リテ擊^ツ二金鳴鼓^スレバ於^ニ阨路^一、雖^モ有^リト二大衆^一、莫^シレ不^ルコト驚^動セ。故^ニ曰^ク、用^{フル}衆^キ者ハ務^メ易^ヲ、用^{フル}少^キ者ハ務^ム隘^ヲ。易^ハ平^地、隘^ハ狭^い地形^一。

（『呉子』第5応變2）

19 丁表 「畢竟魚兔ヲ得ルノ筌蹄ナレバ」

筌^{せん}者^ハ所^ニ以^ニナリ在^ル一^レ魚^ヲ得^テ魚^ヲ而忘^ル筌^ヲ。蹄^{てい}者^ハ所^ニ以^ニナリ在^ル一^レ兔^ヲ得^テ兔^ヲ而忘^ル蹄^ヲ。言^ハ者^ハ所^ニ以^ニナリ在^ル一^レ意^ヲ得^テ意^ヲ而忘^ル言^ヲ。吾^レ安^ン得^テ二夫^ノ忘^言之人^ヲ一、而與^レ之^ノ言^ハ哉^ヤ。（『莊子』雜篇 26 外物）

筌は築、蹄は兎罫。但徠の漢文語法書に『詠文筌蹄』がある。次項参照。

19 丁裏 「口耳不^レ用心^ト與^レ目謀^思テ之^ノ又思^フ神其通^{セン}之^ノ」

筌^{せん}カ乎[、]筌^{せん}カ乎[。]獲^テ魚^ヲ舍^レ筌^ヲ。口^ノ耳^ノ不^レ用[、]心^ノ與^レ目^ノ謀^ル。思^ヒテ之^ノ又[、]思^フ、神^ニ其^ノ通^{セン}之^ノ。則^チ詩^ノ書^ノ禮^ノ樂^ノ、中^ノ國^ノ之^ノ言[、]吾^レ將^ニ聽^ク之^ヲ以^テセ^{ント}一[。]目^ヲ。則^チ彼^レトシ^レ彼^レトシ^レ吾^レヲ有^{トシ}有^{トシ}無^{トシ}無^{トシ}直^道以^テ行^ハ之^ヲ、可^シ以^テ咸^ニ被^{シム}二諸^ノ横^目ノ之^ノ民^ニ一。則^チ可^シ以^テ通^ス二天^下ノ之^ノ志^ヲ一。（『徠先生學則』學則一） 直道は正道、横目之民は人民の意（『莊子』）。

20 丁裏 「然^レトモ而^{シテ}趙^ノ之^ノ地^ノ不^{シテ}二歲^ノ危^ラ一而民不^ニ歲^ノ死^セ一而^{シテ}魏^ノ之^ノ地^ノハ歲^ノ危^{シテ}而民歲^ノ死^{スル}者^何也^一」

孟嘗君^ノ之^ノ趙^ニ謂^{ヒテ}二趙王^一曰^ク、「文^ノ愿^{ハク}ハ借^リ兵^ヲ以^テ救^フ二魏^ヲ一。」趙王^曰ク、「寡^ノ人不^レ能^ハ。」孟嘗君^曰ク、「夫^レ敢^テ借^ル兵^ヲ者、以^テ忠^ナナ

ラントスル^ヲ王^ニ也。」王^曰ク、「可^キ得^レ聞^ク乎^一。」孟嘗君^曰ク、「夫^レ趙^ノ之^ノ兵、非^ズ三能^ク強^キニ於^ニ魏^ノ之^ノ兵^{ヨリ}一、魏^ノ之^ノ兵非^ズ三能^ク弱^キニ於^ニ趙^ノヨリ^一也。然^レトモ而^{シテ}趙^ノ之^ノ地不^{シテ}二歲^ノ危^ラ一、而民不^ニ歲^ノ死^セ一、而魏^ノ之^ノ地歲^ノ危^{シテ}、而民歲^ノ死^{スル}ハ者、何^ゾ也。以^テ三其^ノ西^ニ爲^ル二趙^ノノ蔽^一也。今趙^不レ救^ハレ魏^ヲ、魏^敵二盟^{セン}於^ニ秦^ニ一。是^レ與^ニ強^秦一爲^ス界^ヲ也。地^モ亦^且二歲^ノ危^ラカラント一、民^モ亦^且二歲^ノ死^{セン}ト一矣。此^レ文^ノ之所^ニ以^ニナリ忠^ナラントスル^ニ於^ニ大王^ニ一也。」趙王^{許諾}シ、爲^ニ起^ス二兵^十萬[、]車^三百^乘ヲ一。（『戰國策』卷24 魏策下） 蔽は壅蔽するもの。敵盟は犠牲の血を敵つて盟約すること。

20 丁裏 「談者有^ニ悖^テ於^ニ目^ノ而佛^ヒ於^ニ耳^ノ謬^テ於^ニ心^ノ而便^{ナル}於^ニ身^ノ者^一或^ハ有^ニ悦^{シテ}於^ニ目^ノ而順^{シテ}於^ニ耳^ノ快^{シテ}於^ニ心^ノ而毀^レ於^ニ行^者一」

於^ニ戲^一、可^{ナラ}ン乎^哉、可^{ナラ}ン乎^哉。談^{スル}コト何^ゾ容易^{ナラ}ン。夫^レ談^ハ者、有^リ下^悖リ二於^ニ目^一而佛^ヒ二於^ニ耳^一、謬^{ヒテ}二於^ニ心^一而便^{ナル}二於^ニ身^一者^上。或^ハ有^リ下^悖リ二於^ニ目^一而順^ヒ二於^ニ耳^一、快^{シテ}二於^ニ心^一而毀^ル二於^ニ行^一者^上。非^ズン説^ニ於^ニ目^一順^ヒ二於^ニ耳^一、快^{シテ}二於^ニ心^一而毀^ル二於^ニ行^一者^上。非^ズンバ有^ル二明^王聖^主一、孰^カ能^ク聽^{カン}之^ヲ。（東方曼倩「東方朔」）「非有先生論」、「文選」卷51）

21 丁表 「而今^ニ而後^ニ吾^レ知^レ免^ノ」

曾子有^リ疾[。]召^{シテ}二門弟子^ヲ一曰^ク、啓^ケ二予^ガ足^ヲ一、啓^ケ二予^ガ手^ヲ一。詩^ニ云^ク、戰^戰兢^兢、如^クレ臨^ム二深^淵ニ一、如^シレ履^ム二薄^氷ヲ一。而^今而後[、]吾^知レ免^ル夫[、]小^子。（『論語』泰伯） 臨終の曾子が弟子たちに対して、

かつて「身體髮膚、受クニ之ヲ父母ニ。不ルハニ敢テ毀傷セ、孝之始メ也。」

(『孝經』)と孔子から伝えられた教えを守ったことを示したという話。

「戦戦兢兢」以下は『詩經』小雅「小旻」の詩。

21 丁表 「禮煩ナル則ハ乱ル事」モ神ニ則難シ説命

禮煩シケレバ則チ亂ル。事フルコト神ニ則難シ。(『書經』説命下)

21 丁表 「君子不レ重則ハ不レ威學モ則不レ固」論語

子曰ク、君子不レバ重カラ則チ不レ威アラ、學ベバ則チ不レ固ナラ。主トシニ忠信ヲ、無カレ友トスルコトニ不ル如カレ己者ヲ。過テバ則チ勿レ憚ルコト改ムルニ。(『論語』学而)

固は「意必固我」(『論語』子罕)の一つ。頑迷固陋。

21 丁表 「實熟スル則ハ剥則辱」莊子

夫ノ相梨橘柚果蓏之屬ハ、實熟スレバ則チ剥カレ則チ辱メラル、大枝ハ折ラレ、小枝ハ泄ラサル。此以テ其ノ能一苦ムルニ其ノ生ヲ者也。故ニ不シテ終ヘ其ノ天年ヲ、而中道ニシテ夭スルハ、自ラ捨テニ撃セラル、於世俗ニ者也。物トシテ莫シレ不ルハ若クナルハ是ヲ。(『莊子』内篇 4人間世)

相は櫛、草木瓜。果蓏は木の

実と草の実。掊撃は攻撃。

21 丁裏 「關石和鈞王府ニ則有リ」五子之歌

明明ナル我ガ祖ハ萬邦之君。有リレ典有リレ則、貽セリニ厥ノ子孫ニ。關シレ石ヲ和シレ鈞ヲ、王府ニ則チ有リ。荒ミニ墜シテ厥ノ緒ヲ一、覆シレ宗ヲ絶ツレ祀リヲ。

(『書經』夏書「五子之歌」) 夏王太康の放逸を弟五人が嘆き諫めた歌。

我祖は大禹。石は百二十斤、鈞は三十斤で、五權(銖・兩・斤・鈞・石)の最も重いものを指す。度量衡の細目まで統一して軽重異同を無くしたことを頌える。「則」は語勢を整える働きか。

21 丁裏 「今是大鳥獸則失ハニ其ノ群匹」越レ月ヲ踰テモ時ヲ焉則必反巡シ過ニ其故郷ヲ云々三年問

凡ソ生スルニ天地之間ニ一者、有ルニ血氣一之屬ハ、必ズ有リレ知。有ルレ知之屬ハ、莫シレ不ルレ知ラレ愛スルコトヲニ其ノ類ヲ一。今是レ大鳥獸、則チ失ニ喪スレバ其ノ群匹ヲ一、越エ月ヲ逾レ時焉。則チ必ズ反巡シ、過ギニ其ノ故郷ヲ一、翔回セン焉、鳴號セン焉、蹢躅セン焉、踟躕セン焉、然後ニ乃チ能ク去ランレ之ヲ。小ナル者至リテモニ於燕雀ニ、猶ホ有アラニニ啁噍之頃一焉、然後ニ乃チ能ク去ランレ之ヲ。故ニ有ルニ血氣一之屬者、莫シレ知ルコトニ於人ヨリ一、故人ノ於ケルヤニ其ノ親ニ一也、至ルマデ死ニ不レ窮キ。(『礼記』三年問)

項垂れること。

21 丁裏 「何ソ可ニ而適ス一乎」龜策傳コレ得テ而一ト云ト同語勢ナレトモ可而ノ例ハスクナシ又倭讀ニテハ同様ニヨマレス

罔ハ有レドモ所レ數ナル、亦有リレ所レ疎ナル。人ハ有レドモ所レ貴キ、亦有リレ所レ不レ如カ。何ソ可ケンニ而適ス一乎、物安クニ可ケンレ全カル乎。(『史記』68 龜策列傳)

21 丁裏 「故ニ言フニ而非ヲレ命ニ者ハ有ニ六蔽一焉尔」辨命論コレモ辭ヲユルメテ言而一ト置ナリ直下ニ音讀スル寸ハ得而モ可而モ言而モ語法ハ異ナラズ和訓トナス時大ニ別ナル様ニオモハルナリ

故ニ言ヒテ而非^ズストスルモノニ命^{めい}ニ有^リ六蔽^{りくへい}一焉^の爾^み。(劉孝標「辨命論一首并二序」、

『文選』卷53) 蔽は誤りの意。

21 丁裏 「家有^レ千里^一驥^一而不^レ珍^{トセ}焉^一」云々

夫^そ文章之難^キハ非^{ザル}獨^リ今^ノニ也。古之君子モ猶^ホ亦病^メリ諸^{これ}家^ミ有^レ千里^一驥^一而不^レ珍^{トセ}焉^一。人^ミ懷^ケバ盈^{えい}尺^{しやく}ヲ、和氏^{くわし}モ無^シ貴^キキト^一矣。(曹子建「曹植」)「與^{フル}吳季重^{きちよう}書一首」、『文選』第41) 驥^き(『呂氏

春秋』21開春論)は駿馬。盈尺は一尺余りの玉。和氏之璧(『韓非子』和氏)の故事を踏まえる。

22 丁表 「斬^{シテ}乎^ニ而人^ノ善^{スル}ヲ^一レ之^ヲ斬^ニ乎^ニ而人^ノ不^レ善^{スル}之^ヲヲ^一

内直^キ者^ハ與^ト天^た爲^レ徒^と。與^レ天^た爲^レ徒^と者^ハ知^ル天^{てん}子^しト之^と與^レ己^こ、皆天之所^ナナル^ルヲ^一レ子^しトスル^ル。而^{シカ}獨^どリ以^テ己^こレ言^フヲ、斬^メ乎^ニ而人^ノ善^{スル}セン^トト^一レ之^ヲ、斬^メ乎^ニ而人^ノ不^ラン^{コト}ト^一レ善^セレ之^ヲ邪。(『莊子』内篇 4人間世) 斬は求。人の毀譽褒貶に左右されない意を分節して述べた句法か。

22 丁裏 「不^レ我^ヲ遐^{かき}棄^セ」不^レ患^ニ權^ニ之^ニ我^ニ信^ルヲ^一ノ類^一

「不^レ我^ヲ遐^{かき}棄^セ」は「既^ニ見^ルニ君子^ヲ」不^レ我^ヲ遐^{かき}棄^セ」。(『詩經』周南「汝墳」) 君子は夫、遐棄は捨て置くこと。「人莫^ニ之^ヲ知^ル」は「憂^ヒ来^{タリ}テ無^シ方^ヲ、人莫^ニ之^ヲ知^ル」。(曹丕「善哉行」、『玉台新詠』『文選』樂府) 「推^シ誠^ニ信^ニ士^ヲ」不^レ恤^{うれ}二人^ノ之^ノ我^ヲ欺^クヲ^一。量^リ能^ニ授^ル器^ヲ」不^レ患^ヘ權^ニ之^ニ我^ニ逼^{せま}」。(陸機「弁亡論」、『吳志』卷48)

23 丁表 「論語ノ非^{シテ}ニ夫^ノ人^ノ之^ニ為^ニレ働^ヲ而誰^ニ為^ニン^一」
為^ノ字オモシ必^シモシメタメト訓ズヘキ非^ス

顔淵死ス。子哭^{シテ}之^ヲ働^ル。從者曰ク、子働^セリ矣。曰ク、有^{アル}働^{スル}乎。非^ズテ夫^ノ人^ノ之^ニ為^ニ働^{スル}ニ而誰^ガ爲^ニモン。(『論語』先進) 「爲^メ」よりも「爲^ス」の方がよい。

23 丁表 「荀子ノ文王^ノ之^ニ為^ニレ子^ニ」

吾語^{ラン}汝^ニ。我^ハ文王^ノ之^ニ爲^ニレ子^ニ、武王^ノ之^ニ爲^ニレ弟^ニ、成王^ノ之^ニ爲^ニレ叔父^ニ。吾於^テ天下^ニ、不^レ賤^シカラ矣。(『荀子』33堯問) 吾は周公、汝は子の伯禽。

23 丁表 「不^レ祥^ニ莫^レ大^{ナル}ハ焉^{ヨリ}」
孟^子 莫^ニ不^レ祥^{ナル}大^{ナル}ハ焉^{ヨリ}

ハ奇法ナリ
左^傳

古者^ハ易^カテ子^ヲ而教^フレ之^ヲ。父子之間^ハ、不^レ責^メレ善^ヲ。責^ムレ善^ヲ則^チ離^ル。離^{レバ}則^チ不^レ祥^ニ莫^レ大^{ナル}ハ焉^{ヨリ}。(『孟子』7離婁上) 善人ハ國之主也。王子相^{トシ}ニ楚^ニ國^ニ、將^ニ善^ヲ是^レ邦殖^{セント}而虐^シタル之^ヲ、是^レ禍^ハスル國^ニ也。且^カ司馬^ハ令尹^ノ之^ニ偏^{ヘン}シテ而王^ノ之^ニ四體^也。絶^チ民^ノ之主^ヲ、去^リ身^ノ之^ニ偏^ヲ、艾^キリテ二王^ノ之^ニ體^ヲ、以^テ禍^スニ其^ノ國^ニ、無^シ不^レ祥^{ナル}大^{ナル}ハ焉^{ヨリ}。(『春秋左氏伝』襄公三十年) 楚公の王子熊圍(半圍)が大司馬の爲掩を殺した事件について非難した文章。邦殖は養い育てる意。偏は半身輔佐。四體は手足。

23 丁表 「竊^ニ為^ニ先生^ノ不^レ取^也トアルベキヲ」云々

今先生、率然^トシテ高舉^シ、遠^ク集^リニ吳^ニ地^ニ、將^ニ以^テ輔^ケント^レ治^ル寡人^ノ誠

郷ハ、韓趙ヲ賓從セシムルコトハ、子孰ニ與レシ起ニ。文曰ク、不レ如カレ子ニ。起曰ク、此レ子三ツノ者皆出ツニ吾ガ下ニ。而シテ位加ハルハニ吾ガ上ニ、何ソ也。(同前) 孰與ハ「どちらがよいか(後者の方がよいではないか)」の意。

24 丁表 「得^一無^一ヲ(下略)」 ↓前出(13 丁裏)

24 丁表 「王之學^一華^一皆是形骸之外去^一ト之所^一以^一更^一遠^一」 同

李卓吾批点『世説新語補』には、德行篇第12話に当たるはずのこの章段が無い。『中国古小説集』(世界文学大系71 筑摩書房 一九六四)は金沢文庫本(尊経閣本)、四部叢刊本、王氏(王先謙)思賢講舍本(上海古籍出版社 一九八二)等に依つていて、この章段を載せている。『世説新語補』では、どの刊本が対応するのか。筑摩の大系は現代語訳なので、思賢講舍版から引用する。「王朝毎^ニ以^テ識度^ヲ推^ス華^ニ歆^ヲ」歆^ニ蜡^日ニハ嘗^テ集^メテ子姪^ヲ燕^ニ飲^ス。王^モ亦^モ學^ブ之^ヲ。有^リ人向^{ヒテ}張^ニ華^ニ説^ク此^ノ事^ヲ。張曰ク、王之學^ブハ華^ヲ、皆是^レ形骸之外^ニ去^ルコト之所^ニ以^ニナリ更^ニ遠^キ。蜡日は年越しの祭。形骸は外形だけのもの。

24 丁表 「吾有^ニ羊^ニ上^ニ林^ノ中^ニ」 平集

初メ(ト)式不^レ願^ハ爲^ル郎^ト。上曰ク、吾有^ス羊^ヲ上^ニ林^ノ中^ニ。欲^ス令^メ子^ニ牧^セ之^ヲ。式乃チ拜^{シテ}爲^ル郎^ト。布衣^ニ屬^ニ而牧^ス羊^ヲ。歳餘^ニ羊肥^ス。上過^{リテ}見^ニ其^ノ羊^ヲ、善^ス之^ヲ。式曰ク、非^{ザル}獨^ニ羊^ノ也。治^ム民^ヲ亦^ナ猶^ホ是^レ也。以^テ時^ヲ起居^{セシメ}、惡^シキ者^ハ輒^チ斥^ケ

去^リ母^ナ令^ムルコト敗^ラ羣^ヲ。上以^テ式^ヲ爲^シ奇^ト、拜^{シテ}爲^{シテ}緱^氏ノ令^ト一試^ム之^ヲ。緱氏便^{トス}之^ヲ。遷^{シテ}爲^ス成阜ノ令^ト。將^ヲ漕^最。上以^爲ラ式^ハ朴^{ナリト}。拜^{シテ}爲^ス齊王ノ太傅^ト。『史記』平準書) 郎は役人、令は長官。布衣は綿服。屬は麻製の履。草鞋ともいわれる。将漕は運漕を宰領すること。太傅は輔佐役。

24 丁裏 「夫如^{ナレバ}是^ノ也爲^レ物甚^ニ衆^ク爲^レ己甚^ニ寡^シ」 運命論本文ニ就テ委^クミルベシ

夫^レ如^クナレバ是^カノ也、爲^ルハ物甚^ニ衆^ク、爲^ルハ己甚^ニ寡^シ。『文選』卷53、李蕭遠(李康)「運命論一首」 耳目心意を娛ませるものは世間にいくつでもあるが、わがものにできるものはいくらもないという文脈。

24 丁裏 「咫尺之内便覺^フ萬里^ヲ爲^レ遥^ト」 世説

これも『世説新語補』注記からの引用か。『参考』「幼クシテ好^ミ學^ヲ有^リニ文才^一、能^クシ書^ヲ善^クス畫^ヲ。於^ニ扇上^一圖^ク山水^ヲ。咫尺之内、便^チ覺^ユ萬里^ヲ爲^レ遙^ト」(『南史』齊武帝諸子伝)

25 丁表 「夏小正鷹則爲^レ鳩^トノ下ニ……トイヘリ」

鷹則爲^ル鳩^ト。鷹^{ナル}也^ハ者、其ノ殺^ス之時^也。鳩^{ナル}也^ハ者非^{ザル}其ノ殺^ス之時^一也。善^ク變^{ジテ}而之^ク仁^ニ也。故^ニ其^ノ言^フ之^ヲ也、曰^フ則^ト。盡^ス其^ノ辭^ヲ一也。鳩爲^ル鷹^ト、變^{ジテ}而之^ク不^レ仁^ニ也。故^ニ不^レ盡^サ其^ノ辭^ヲ一也。『大戴礼記』夏小正二月) 「故^ニ其^ノ言^フ之^ヲ也」は通解「故^ニ具^ニ言^フ之^ヲ也」に作る。「鷹爲^ル鳩」が「則」一字でその順当な変化である含

意を示すことになるという。

25 丁裏 「春秋僖十六年二隕石アリ于一宋五」

十有六年、春、王正月戊申朔、隕石アリ于宋^一、五^ツ。是^こ月、六^{げき}鵠退飛シテ過^グ宋^ノ都^ヲ。鵠は水鳥の名。天子の乗る舟の舳先をこの鳥で象り、「鵠首」と呼ぶ。退飛するとは、疾風のために後ずさりして飛ぶ意というが、時人が凶兆と見做したものと解釈されている。『後漢書』天文下にも引く。『漢書』五行志下には「釐公十六年^{リこう}」とする。釐公は『史記』の表記で僖公に同じ。

25 丁裏 「公羊傳二曷為先言隕而後言石三隕石ハ記スレ聞ヲ々二其ノ隕然タルヲ一視レ之則ハ石察レ之則ハ五」

曷^{なんす}為^レ先^ニ言^ヒ隕^ヲ而^レ後^ニ言^フ石^ヲ。隕石ハ記スレ聞クトコロヲ。聞^キ二其ノ隕然タルヲ一。視^レバ^レ之^ヲ則^チ石^ニシテ、察^ミレ^バ之^ヲ則^チ五ナリ。^{（略）}曷^{なんす}為^レ先^ニ言^ヒレ六^ヲ而^レ後^ニ言^フ隕^ヲ。六鵠退飛ストハ、記セル見ルトコロヲ也。視^レバ^レ之^ヲ則^チ六^ニシテ、察^ミレ^バ之^ヲ則^チ鵠ナリ。徐^ロニ而^レ察^レバ^レ之^ヲ則^チ退^キ飛^ブ。五石六鵠トハ、何^ヲ以^テ書セル。記セル異^ヲ也。外^ハ異^ハ不^ルニ書セ、此^レハ何^ヲ以^テ書セル。為^レバ^ニ王者之後^一、記セル異^ヲ也。王正月の「王」は周曆に従う意で、春の初めの月の頭に記すという。隕然は怒る様。怒号に似た爆音の意か。視・察は目を留めてよく見る意。異は異変・災異。

25 丁裏 「左傳注二莊ノ七年ニ星隕テ如雨フル見ニ星之隕テ而墜ル一於ニ

四遠」云々

隕ハ落也。聞^キテ^ニ其ノ隕ツルヲ一視^レバ^レ之^ヲ、石ナリ。數^フレ^バ之^ヲ五アリ。各^々隨^ヒテ^ニ其ノ聞見ノ先後^{せんこう}ニ而^レ記ス^レ之^ヲ。莊ノ七年ニ星隕^チテ如^シレ雨フルガ。見^レバ^ニ星之隕^チテ、而^お隊^{ツル}ニ於^ニ四遠^ニ、若^もシクハ山若^{シク}ハ水、不^レ見^ニ在^ルノ地^ニ之^{しるし}驗^ヲ。此^ハ則^チ見^テニ在^ルノ地^ニ之^レ驗^ヲ、而^不レ見^ニ始^メ隕ツル之星^ヲ。史各^々據^リテ^レ事^ニ而^レ書ス。^{（『春秋左氏伝』僖公十六年注）} 經文割注。「莊ノ七年」云々は「夏四月辛卯、夜恆星不^レ見、夜中星隕ツルコト如^シレ雨フルガ。」（『春秋左氏伝』莊公七年）

26 丁表 「夏小正正月……」 「九月……」

正月、啓^{せい}ク^レ蟄^{ちつ}。〔傳〕言^フコロハ始^テ發^クレ蟄^ヲ也。鴈北^{むか}郷^{むか}。〔傳〕先^ニ言^ヒテ鴈^ヲ而^レ後^ニ言^フハ郷^{きやう}者何^やソ也。見^レテ鴈^ヲ而^レ後^ニ數^{はか}レバ^ニ其ノ郷^ヲ也。郷トハ者何^ソ也。郷トスルニ其ノ居^ヲ也。鴈以^テニ北方^ヲ一爲^スレ居^ト。何^ヲ以^テ謂^テレ之^ヲ爲^スレ居^ト。生^レ且^ツ長^{ズル}焉^の爾。九月遷^ゆク鴻鴈アリ。先^ニ言^ヒレ遷^ク而^レ後^ニ言^フハ鴻鴈^ヲ一何^ソ也。見^レテ遷^ク而^レ後^ニ數^レレバ^レ之^ヲ則^チ鴻鴈也。何^ソ不^ルレ謂^ハニ南^ニ郷^{フト}一也。曰ク、非^ザレバナリニ其ノ居^ニ。故^ニ不^レ謂^ハニ南^ニ郷^{フト}一、記^スニ鴻鴈之^ニ遷^クヲ一也。如^キハ不^ルガレ記^サニ其ノ郷^ヲ一何^ソ也。曰ク、鴻^ハ不^ルニ必^ズシモ當^ラニ小正^の之^クニ者^{ナレバ}也。^{（『大戴礼記』47 夏小正）} 夏小正は夏代の農事曆。蟄は虫が隠れ棲むこと。

26 丁表 「降^{セン}矣哉終^シニ身^ヲ夷狄ニ戰^ハン矣哉骨暴^{サン}ニ沙磧^ニ」

鼓衰^ヘ兮力盡^キ、矢竭^{ツク}シテ兮絃絶^シ、白刃交^マツテ兮寶刀析^レ、兩軍蹙^{セマ}ツテ兮生死決^ル。降^ルシカ矣哉、終^ニ身^ヲ夷狄^ニ、戰^ハシカ矣哉、骨^ヲ暴^サシ沙礫^ニ。

(李華「吊^トフ^ニ古戰場^ヲ」文)、『続文章軌範』卷3、『古文真宝後集』下)

26 丁表 「魚行ハ水濁リ鳥飛ハ落ツ毛」

垂^ス示^ニ云ク、魚行^{ケバ}水濁リ、鳥飛^{ベバ}毛落ツ。明^ラカニ辨^ジ主賓^ヲ、洞^{アキ}ラカニ分^カツ

縮^シ素^ヲ。直^ニ似^{タリ}ニ當台ノ明鏡、掌内ノ明珠^ニ。漢現^{ジテ}胡來リ、聲彰^{ハレ}色

顯^{ハル}。且^シク道^ハ爲^ニ什麼^カカ^レ如^クナル^レ此^カ。試^ミ擧^ス看^ミ。(下略)『碧巖錄』第29

則) 縮素は黒白。爲^ニ什麼^ハは何故。擧^ス以下^ノの提唱は省略。なお、「夾山

圓悟禪師克勤和尚、頌古^ニに云ク、『魚行^{ケバ}水濁リ、鳥飛^{ベバ}毛落ツ。至鑑難

ク^レ逃^レ、太^ハ寥^ハ廓^{タリ}。一往^テ迢^テ迢^{タリ}五百生、只^ヨ縁^{ツテ}ニ因果^ニ大修行^ス。

疾雷破^リ山^ヲ風震^{ハス}海^ヲ、百鍊^ノ精金色^{不^レ改^マラ}。』この頌なほ撥無因果

のおもむきあり、さらに常見のおもむきあり。」(『正法眼蔵』7深信因果)

28 丁表 「東坡ノ與ルニ黄魯直ニ書ニ凡人文字當^ニシニ務^テ使^ニ平和ナラ

至足之餘溢^テ爲^ニ恠^奇ト蓋出^ル於^レ不^レ得^レ已[」]也トイヘリ」

某啟^ス。晁君ノ騷詞、細^{カニ}看^ルニ甚^ダ奇麗ナリ。信^ニ其ノ家多^キ異材^一耶。然^レ

ドモ有^リニ少意^一。欲^ス下^ニ魯直^ニ以^テ己^ノ意^ヲ一微箴^{セント}上^レ之^ヲ。凡^ソ人ノ文字、

當^ニシニ務^{メテ}使^ムニ平和ナラ^一。至足之餘、溢^{シテ}爲^ニ恠^奇ト蓋出^{ツル}於^ニ於

不^ルニ^一得^レ已[」]ムコトヲ也。晁文ノ奇麗似^{タリ}ニ差^ヤ早^キニ。然^{レドモ}不^レ可^ラ直

ナル云爾。非^ズ謂^フニ避^ケヨト諱^キ也。恐^{ラクハ}傷^{ツケン}ニ其ノ邁^マ往^ウ之氣^ヲ。當^ニ

下^ニ爲^ニ二朋友^ノ一講磨之語乃^チ宜^{シカル}上。不^レ知^ラニ以^テ爲^ニスヤ然^{リト}否^ヤ。不

宣。(『蘇軾文集』卷52) 魯直は黄庭堅の字。晁君は黄庭堅(黄山谷)と

共に蘇門四学士(他に張耒、秦觀)と称された晁輔之の叔父晁載之。劭博

「宋」『劭氏聞見後録』卷14に黄庭堅が晁の「閔^{アハ}レム^ニ吾ガ廬^ヲ」賦」につ

いて蘇軾の意見を求めたのに答えた書とある。騷詞は辞賦の文章。騷は

離騷に由来し風流韻事を指すようになった。騷人 騷客は詩人の意。不

宣は手紙の結語。不一 不尽に同じ。同書にはまた「蓋^シ出^{ツル}ニ于^ニ不^ルニ

得^レ已[」]ムコトヲ耳。晁君ノ喜^ブレ奇^ヲ太^ダ似^{タリ}早^キニ」とある。そして「此^レ文

章ノ妙訣、學者不^レ可^ラ不^ル知^ラ。」とする。

28 丁裏 「其^ノ爲^リレ人也溫柔敦厚ナル詩^ニ教^ル也トアリ」

孔子曰ク、入^{リテ}ニ其ノ國^ニ其ノ教^{可^キレ知^ル也}。其^ノ爲^リレ人ト也、溫柔敦厚ナル

ハ詩ノ教也。疏通知遠ナルハ書ノ教也。廣博易良ナルハ樂ノ教也。(下略) (『礼記』

26 経解)

30 丁裏 「閔^{アハ}レ哀^レ而不^レ傷^レ樂^レ而不^レ淫^トノ玉ヘルモノ意味ナリ」

子曰ク、關雎ハ樂^{ミテ}而不^レ淫^セ。哀^{シミテ}而不^レ傷^ラ。(『論語』八佾)

31 丁表 「詩ハ性情ヲ述^ル者也ト古ヨリイフナリ」

曰ク、吾聞^クレ之^ヲ。凡^ソ詩之所謂風トハ者、多^ク出^デテ於^ニ於里巷歌謠之作^{ヨリ}、

所謂男女相與^ニ詠歌^シ、各^々言^フニ其ノ情^ヲ一者也。惟^タ周南召南ノ親^{シク}被^レ

リ文王之化^ヲ一以^テ成^シレ德^ヲ、而人皆有^リニ以^テ得^ルニ其ノ性情之正^{シキ}。故

其ノ發スルニ於言ニ者、樂シミテ而不レ過ギ於淫ニ、哀シミテ而不レ及バ於傷ルニ。是ヲ以テ二篇獨リ爲ス二風詩之正經ト。自リシテ一擲風而下ハ、則チ其ノ國之治亂不レ同ジカラ、人之賢否亦タ異ナリ、其ノ所ノ二感ジテ而發スル一者、有リニ邪正是非之不_レルモノ一_レ齊シカラ。而シテ所謂先王之風ハ者、於テ此ニ焉變セリ矣。(朱熹『詩經集伝序』) 風詩は『詩經』国風の詩。

32 丁表 「詩三百一言以蔽_レ之ヲ曰思無_レ邪トノ玉ヘル」

子曰ク、詩三百、一言以テ蔽_レ之ヲ、曰ク思_レ無_レ邪。(「論語」爲政) 蔽は総括する意。「さだむ」は蔽獄のように使うが、意味は関連し合う。詩三百は『詩經』の別称。

34 丁表 「盛唐之格格ノ高ハ似_二梅花ニ等ノ語ミルベシ」 ↓次々注

34 丁裏 「調ハ_レ和合也又揉伏也ト注ス」

「調」を『説文解字』に「和合也。」「韻會』に「揉伏也。」と釈す。

35 丁表 「古人ノ詩評ニ採_二菊ヲ東籬ノ下ニヲ格高シトイヒ」ニ云々

予毎ニ論ズル詩ヲ、以テ二陶淵明・韓杜ノ諸公ヲ一皆爲ス二韻勝ルト一。一日見ユルニ林倅_ニ於徑山ニ、夜話及_レ此。林倅曰ク、詩三有_レ格有_レ韻、故ニ自_レ不_レ同ジカラ。如キハ二淵明ノ詩ノ一是_レ其ノ格高ク、謝靈運ノ池塘春草之句ハ乃チ其ノ韻勝ル也。格ノ高キハ似_二梅花ニ、韻ノ勝ルハ似_二海棠ノ花ニ一。予時ニ聽_レ之ヲ、豐然トシテ若シ有_レルモノノ所レ悟ル。自リ此讀_レムコト詩ヲ頓_ニ進ミ、便チ覺_レエ兩眼如クナルヲ一_レ月ノ、盡ク見_レル古人ノ旨趣ヲ一。然レバ恐_レ前輩或ハ有_レル

一_レ未ダ_レルトコロ_レ聞カ。(「詩有格高有韻勝」)、「宋」陳善『捫虱新話』) 豐然_ニは翻然として目を睜_ミる貌。捫虱は人前で虱を捻_リ潰_ス底_ニの無礼な振舞い。

35 丁表 「文徵明ハ以_レ格ヲ勝_レ主履吉ハ以_レ韻ヲ勝_レ」

文徵明(衡山) 主寵(履吉) は明の書家・画家。本文の出典は未詳。江戸中期の絵師伊藤若冲の画号は大典が「大盈若冲」(『老子』) からとつて与えたものといわれる。『小雲棲稿』卷八(小雲棲は大典の号の一つ)に「藤景和画記」(景和は若冲の字)という若冲の評伝が載るといふ。明の文人画家たちの知識もこうした交際の中で深められたか。

36 丁裏 「文章軌範ニ放膽小心ノ二科ヲ立タリ」

大凡學_レ文ヲ初メハ要シニ膽_ニ大ナラシトヲ一、終リハ要スニ心ノ小ナラシトヲ一。由_レ麤_ニ入_レリ細ニ由_レリ俗入_レリ雅ニ由_レリ繁入_レリ簡ニ由_レリ豪蕩_ニ入_レリ純粹ニ。(『文章軌範』一候字集 放膽文序) 「麤」は「粗」。

36 丁裏 「王元美ノ論ニモ文章ノ枕竅不_レ過ニ放膽小心ノ二端ニ何也文

非_レハニ小心ニ識弗_レ沈ナラ也非_レハニ放膽ニ氣弗_レ壯ナラ也知_二放膽小心之說ヲ一則ハ文章家思過_二半ニ矣トイヘリ」

出典未詳。王元美は王世貞。李于鱗(李攀龍)と並称され、但徠を始め古文辞学派に推戴された。

【補足】

各種テキストの確認に当たっては、『漢文大系』や各種版本になるべく当てるようにしたが、時間等の制約から Web 資料にも多く頼った。次のウェブサイトなどから恩恵を蒙った。

国会図書館のデジタルアーカイブ（電子書庫） <http://www.ndl.go.jp/>
同館「近代デジタルライブラリー」 <http://kindai.ndl.go.jp/>
早稲田大学「古典籍総合データベース」

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

中国哲学書電子化計画 <http://ctext.org/zh/>

漢典 <http://www.zdic.net/>

Hathi Trust Digital Library <http://www.hathitrust.org/>

Internet Archive <https://archive.org/>

CiNii（国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ）Books <http://ci.nii.ac.jp/books/>

【付記】

1 翻刻本文・注記中の訓読漢文は、拙作「漢文エディタ」で入力し、HTML 形式で出力したものを MS Word に貼り付けたものがほとんどである。余白がまだ多少あるので、前号の紀要に書き切れなかった「環境依存文字」の取り扱いについて補足すると、方法は二つある。

（1）入力フォームにその文字を入力し、ボタンを使ってユニコード 16 進文字実体参照にエンコードしておく。（例 漢→󿩇）とりあえず登録した後で各種変換時にデコードする。ただし私は次の方法を勧める。

（2）そのまま登録した場合にはエラーメッセージが出るので、再度「？」箇所該当文字を打ち込み、訂正保存ボタンで保存すると、またエラー画面が出て VB エディタ画面になる。そのままマクロの実行を一旦停止し、再度入力フォームを起動するとすでに文字は入力されている。それから各種変換タブに移動する。Word に出力して、必要な文章に貼り付けた後、全体のフォントの大きさを変更するなどの変換を行う。

※ これらは、現在の文字コード処理の制限により起こる。私は、この操作の後、データをコピーし、環境依存文字を扱える「真魚（まな）」（<http://www.vector.co.jp/soft/winnt/writing/sec219008.html>）等のエディタに貼り付け、再度エンコードを繰り返してブラウザで表示し、Word に貼り付けている。（そのエディタにも VBS で作った自作マクロを割り当てる。WEB サイトで公開している。）大変面倒な手続に見えるが、慣れれば一連の操作である。すべてを一括で変換できるような「漢文エディタ」ができればいいと思う。

2 本稿では MS Word で左ルビを振っている。その方法を付記しておく。例えば「漢文」のようにルビを振った文字を選択し（またはその直前にカーソルを置き）、SHIFT+F9 を押す。フィールド・コードが表示されるので、[EQ ¥* jc2 ¥* "Font:IPA 明朝" ¥* hps12 ¥oYad (¥styup 9 (かんぶん), 漢文) (漢字は横書き) の「漢文」の後に、¥*do 9 (かんぶん) のように補い、中の文字「からぶみ」に対して「かんぶん」と同じ書式を適用し、もう一度 SHIFT+F9 を押せばよい。はみだしの具合に応じて hps と up, do の後の数字を適宜修正しながら表示の具合を調整していく。ただし、フィールドコード自体を手入力で打つことはできない。部分を修正していくだけである。これらを自動で操作できる日本人向けのワープロがまだ無い。縦書きブラウザが実用化すれば、あるいは HTML の新バージョン、もしくは CSS で対応可能になるかもしれない。どれもまだ先の話である。